

第2章 勉強、学び、LOVE OTHERS!

1. 生物はみな生きるために勉強してきた

今この地球上には約60億もの人がいる。そしてその数をはるかに超える生物がこの地球上には存在する。人間が今までに見つけた生物は約200万種。でも未知の生物は1000万種とも1億種とも言われるんだ。だから僕たちが知らないだけで、この地球には本当はたくさん生物が生きている。僕は勉強すると言うことは「生きる方法」を知るためにするものだよ。他の無数の生物達も必死に生きている。じゃあそんな生物たちだって勉強しているはずだ。一体どんな勉強をしているのだろうか。一緒に考えてみよう。

まずは生物についての基礎知識を確認してみよう。次のクイズに答えてみてね。

地球の歴史クイズQ&A

Q. 君は地球が誕生したのはいつ頃か知ってるかい？

A. なんと46億年前！そして生物が誕生するのが30億年前。気の遠くなるほど昔だね。

Q. じゃ恐竜がいたのはいつ頃だ？

A. 約2億年前！そして恐竜の絶滅が6500万年前と考えられている。まだまだ人間は誕生していない。

Q. では、人類が誕生したのはいつ頃だろう？

A. 約400万年前にアウストラロピテクスという猿人が誕生したよ。やっと人類登場だ。

生物はその誕生以来、長い年月をかけて進化してきた。30億年前には地球には酸素がなかったから、微生物たちは硫酸の海の中で生きていく術を身に付けた。もちろん原始の動物達は頭を使って学ぶ事は出来ないから、「本能」を使って学習した。学習できずに死んでいたり、滅びていった者も多くいたはずだ。環境に適応していく方法を身に付けたものだけが生き残っていきける。学習しない者は滅びるのが自然界の法則なんだ。厳しいね（泣）。

やがて地球に植物が生まれ、動物が生まれた。魚類から両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類と、動物達は海から陸へと生活できるように進化を遂げた。今では陸上で生活することは当たり前前と思うけど、陸地で生きるのはものすごく大変な事なんだ。

生物は水分が無いと生きていけない。人間の体の4分の3、つまり75パーセントは水分

できているんだよ。その水分のほとんどは血液で、血液が不足すると人は死んでしまう。君も朝起きてから夜寝るまでにたくさん水分を摂っているだろう。それ位生物にとって水分というのは大事なものだ。

そんな大事な水分、海で生きていくなら水分は豊富にあるけど、陸地ではそう簡単に手に入れることはできない。水分を得られなければ動物はすぐに死んでしまう。だから初期の生物にとって、水分を手に入れる勉強は何よりも一番大切だったんだ。

初めて生物が陸上上がった時、それは海や川と陸地の境界線あたりに生息する両生類だった。約4億年前のことだ。両生類は水中と陸上を行き来しながら、文字通り両方で生きる方法を学んだ。すごい勉強だよ。

両生類の代表格カエルは幼生の頃、オタマジャクシとして水中で生活する。一生涯をかけて水中から陸上へと進化していく。同じく両生類のイモリも、水分が近くにあるところで生活する。イモリは漢字で「井守」と書く。井戸を守ると言う語源は、水の近くでないと生きていけないことを表している。ずっと水中にいらなくても、水の側にいれば生きていけるってことをイモリは勉強したんだね。

やがて動物はもつと陸地の中心部へと移動を始める。でも陸地にいけばいく程、厳しい乾



約2億年前の地球は、乾燥を克服した爬虫類(恐竜)の天下だった。

日本にだつてももちろん恐竜はいた。日本竜とも呼ばれるニッポノサウルスが1934年に樺太で発見されてから、日本本土でも1978年以降各地で恐竜の骨が発掘されている。日本近海にも、フタバズキリュウという首長竜がいたことが化石の発掘などからわかっている。君が今いるその場所に、恐竜達がいたんだ。2億年という、気の遠くなるほど昔に。

乾燥が待っている。その乾燥に耐えるため、動物たちは自分の肌を硬いウロコで包み、身を守った。新たな環境に体が進化していったんだ。それが爬虫類と言う生物だ。爬虫類は乾燥を克服し、陸上のほとんどの地域に分布していった。地球は爬虫類の天下だった。爬虫類は大型化し、恐竜と呼ばれるようになった。恐竜という言葉は、本当は陸上の大型爬虫類だけを表すんだよ。他にも翼竜、首長竜、魚竜と爬虫類達は地球の至る所で生活を始めた。

恐竜達は陸上で豊富な空気と食料を手に入れ、住む場所を見つけて子孫を作り、繁栄していった。同様に翼竜は空を自由に飛びまわり、首長竜、魚竜は海中を泳ぎまわっていた。テイラノサウルス、トリケラトプス、プレラノドン、いつの時代も子どもたちのヒーローになる恐竜が、実際に子の地球で生きていたんだ。

恐竜達は陸でも海でも栄華を極めたが、もちろんそれでも命の危険はあった。山に生息する恐竜は、足を踏み外して崖から落ちたら死んでしまう。平野に暮らす恐竜は、ティラノサウルスに見つかったら食べられてしまう。自分が生きるために、命を守るために、恐竜達は最善の選択をしなければならなかった。選択のミスは死につながってしまうから。そんな方法を恐竜達は本能で学習していた。

誰だつて危険な目に遭えば、次から注意をする。同じシチュエーションに遭遇すれば、「また同じ危険が起こるんじゃないかな？」という防衛本能が働き危険を回避できる。

人類は動物の中で唯一「火」を伝える。それがなぜか考えたことはないかい？僕はちよつと考えてみたよ。きつと火の始まりは、落雷とか火山の噴火による溶岩などで木に火が付いたものだったんだろう。メラメラと燃えている炎を見て、狼やトラ、ライオンなどはどうしたんだろうか。彼らは四足歩行だから、あごや歯が発達している。噛み付くことにかけては天下一品だ。獲物を見つけたら走って行ってガブツ！それが彼らのやり方。でも火に向かってはガブ！ってやったら・・・

熱ッ！

つてなるだろう（笑）。それ以降、猛獣達は火に近寄らなくなった。

また、動物達はよく匂いを嗅ぐよね。犬などは視力が余り良くない分嗅覚が発達し、色々なものの匂いを嗅ぎ分けられる。警察犬が犯人の匂いを覚えたり、麻薬を匂いで見つけたりして活躍しているのを聞いたことがあるだろう。君の周りにいる犬だって、人や電信柱、餌を見つけたら、まずは匂いを嗅いで安全かどうか確かめるだろ。だからきつと彼らが火を見た時には同じように鼻を近づけていったんだろう。そうしたら・・・

熱ッ！

ってやっぱりなるだろう（笑）。それ以降、動物達も火に近寄らなくなった。

結局手が使える人間だけが火という「道具」を手に入れた。人間は手に持った木の棒や他の動物を「身代わり」に火を移した。そうやって火に触れたらどうなるかという「実験」をしたんだ。その結果、火が付くと物質は燃えて黒焦げになってしまうことや、火は直接触らなければ夜でも暖かくいられること、さらには他の動物たちが火を怖がっているという事まで勉強した。こうして人間は地球上で他の動物を圧倒して生きていくことができるようになったんだ。つまり人間の本能は、試しにやってみようという「好奇心」だったというわけだ。

本能は動物の基本的な学習能力だ。頭を使って考えるのではなく、「なんか怖い」「なんか

危ない気がする」と危険を回避するように体が動く。今でも多くの動物は人間を恐れる。野良猫や野良犬も人間が近づくと逃げていく。それは本能的に恐怖を勉強しているからだ。逆に自分より弱いものを見つけたら全力で襲い掛かっていく。動物は自分の体の能力を本能的に知っていて、足が速いものはその足を生かし、空を飛べるものはその翼を生かし、聴力に優れたものはその耳を生かして生活している。動物達はみんな賢いんだね。

でも本能だけでの勉強には限界がある。動物の本能はその状況が訪れたときに始めて発動するからだ。獲物を見つけた瞬間に体が獲物に向かって走り出す。敵に気付いた瞬間に体は逃げ始めている。このように動物の持つ本能は瞬間的に発揮されるものだ。逆に言えばその状況が訪れない限り勉強することはないし、勉強したことを積み重ねていくことも無い。結局その場しのぎの生き方しかできず、危険な状況を見越して備えておくことは出来なかった。だから約一億年もの間地球の支配者だった恐竜達も、未知の危機が訪れた時にはどうすることも出来なかった。恐竜達は隕石の衝突による氷河期を乗り切れず、絶滅した。隕石の衝突による事故で死んでしまったのは仕方が無いとしても、その後地球に起こった環境の変化を乗り切る方法を、彼らのうちの誰一人として知ることが出来なかった。だから恐竜は滅びた。

やがて誕生した人類は、寒冷な気候から身を守る術を勉強することによって身に着けた。最初は自分の体毛で、体を寒さから守って冬を凌いでいたが、氷河期の人類は自分の体毛だけでは寒かったのだから、他の動物を狩って、その毛皮を身にまとうことで寒さを克服することが出来た。(頭いい！)

今でも「服を着る」という発想を持つ動物は人間位だよ。当時の人間、人類達はすごいことを考えたものだ。彼らは本能の好奇心をフルに使って、それまで知っていた勉強を「学び」にまで高めていった。どの動物も自分が住んでいる世界の仕組みを勉強する。ライオンは獲物の狩り方を、ウサギは敵に隠れて繁殖する方法を。人間だって世の中の仕組みを知るために勉強している。でも勉強だけでは生きてはいけない。勉強によって知った過去の生きていく方法を自分の頭で考え直し、新たな方法を編み出していかなければ、未知の出来事に遭遇したときに対処できないからだ。人間はこれが出来た。本能的に「こうやってみたらどうだろう」「これを試してみたらうまくいくんじゃないか」という好奇心を持っていた人間という動物は、勉強によって世の中の仕組みを知り、それを土台にして新たな生きる方法を編み出すことができるようになった。このようにして少しずつ学問が発達していったんだ。

氷河期の人間にとっては勉強することも、それを生かして学ぶことも自然だった。もし仮

に、君が彼らに会ったとして、「何でそんなに勉強したんですか？しかも自分で学んだりまでして。すごくないっすか？」と聞いてみたら、氷河期の人類はなんて答えるだろう？

「寒かったら死んでしまっただろ！世の中のことを知らなけりや死んでしまっし、自分で新しい方法を学んでいかなければ生きていけないんだから、当たり前だろ！アホな質問するな！」

ほら、怒られただろ（泣）。人間にとつては勉強も学びもいたって普通のことなんだね。

他の動物と比べて体が小さく、力もない人類は、他の動物にない「学び」を磨くことによって生きる手段を身に付けていった。人間の本能は前に述べたように「好奇心」だ。人間たちは「これはどういう仕組みなんだろう？」「これはどうしたらうまくいくのだろう？」と頭を使って考えることによって、それまでには無かった未知の方法を見つけ出すことが可能になった。そのお陰で恐竜達に代わって、地球でこれだけ繁栄していくことが出来たんだ。

このように生物の歴史を見ると、生物にとつて「勉強」とは生きていくためには絶対必要な要素だった。世の中のこと、自然界のルールを知らなければ生きてはいけなから、勉強することは当たり前のことだった。そして、人間は勉強した知識を組み合わせて、自らそのルールを作り出すところまで進化した。火を使う、空を飛ぶ、宇宙にだって行ける。み

んなが学びをしているわけじゃないけど、今の世の中を創ってきたのは間違いない「学び」をした人達だ。世の中を動かすには勉強だけじゃなく、学びも必要となる。誰かがそれをやらなければ人間に明日は無い。それはもちろん昔も今も同じ。だからこそ勉強は、すべての土台となる勉強は、生きるためには当然しなければならぬ。そう、文字通り強制されてでも、やらなければならぬんだ。

**勉強は生きるためにするものだ。勉強しないヤツは滅びてしま
うのがこの世の中のルールだ。**

2. 勉強から学びへ

生物はみな、勉強しながら必死で生きている。でもそのやり方はそれぞれ異なる。人間以

外の動物たちは大きな体や強い腕力、鋭い牙など体の特徴を生かして生きていけるから、本能を頼りに最低限の勉強をしていけば大丈夫だった。だが、人類という動物はそんな身体的特徴をもっていない。

人間は足が遅い。世界一早い人の時速は約37キロメートル。世界最速のチーターはなんと時速113キロメートル。ダチョウは時速80キロ、ライオンは時速64キロ、アフリカゾウだって時速39キロで人間より速いんだ。人間は犬や猫にだって追いつけない。

そして人間は小さい。僕は結構背が高い方で、身長は1,82メートル（182センチメートル）。でも世界一大きいシロナガスクジラは体長33,6メートルもある。アフリカゾウは体長7,5メートル、フタコブラクダでも体長3,5メートルもある。体重で比べてみても僕が大体（笑）85キログラム。シロナガスクジラの体重は最大で200トンにもなるから、僕を300人以上集めないと釣り合わない。陸上で最も重いアフリカゾウは7,6トン。人間に近い動物だって人間よりも重い。ニシゴリラというゴリラは体重が160キログラムもある。嗅覚では犬にかなわないし、聴覚でもウサギにはかなわない。

人類が他の動物と大きく違うのは、せいぜい二足歩行が出来ることくらいだ。え？それだけって思ったんじゃないかな。でも、これが人間が他の動物を圧倒する何よりも大事な能力

になったんだ。

Q. 二足歩行が出来ると何がいいの？

A. 足で歩くことが出来れば、前足である「手」が自由に使えるじゃないか。

Q. じゃあ手が使えるとどんないいことがあるの？

A. 手を使うとモノを持てる。モノを手に持つと、足や口でモノを持つよりも自由に動かすことが出来る。例えば左手に棒を持って、右手に石を持つ。そしてその二つを合体させる。そんなことが出来るようになるんだ。便利だろ。

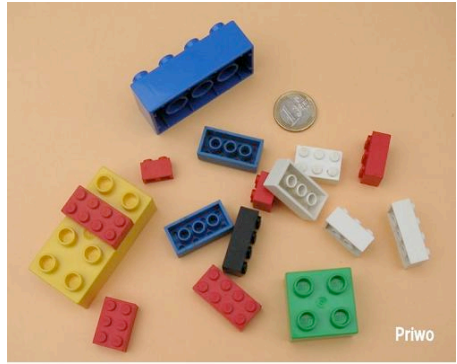
この「物を組み合わせる」という技術は人間特有の能力となった。サルやオランウータンなども道具を使うことは出来る。棒を使って餌を取ったり、草のストローを使ったり、モノを直接道具として使うことは出来る。でも人間は、モノとモノを組み合わせて新しい道具を生み出すことを可能にした。

この地球上にある「モノ」には限りがある。それをそのまま使うなら、いつかそれは無くなってしまふだろう。だけどもモノとモノを組み合わせれば、1+1が2にも3にもなるから無限の可能性が生まれるんだ。石油という資源をそのまま使ってきた人間は、その資源が無

くならうという時に「新たな」エネルギーを自分たちで創ろうと試行錯誤を重ねている。太陽のエネルギーを使った太陽光発電、風の力を使った風力発電、地中のマグマの熱を利用した地熱発電なんでももある。波を使った波力（潮力）発電があったり、最近では「家畜排せつ物や生ゴミ、木くずなどの動植物から生まれた再生可能な有機性資源」であるバイオマスエネルギーも注目を集めている。だから僕らは未来に絶望しない。恐竜は環境の変化になす術もなく絶滅してしまったが、僕らは最後の最後までできつとあがくだろう。それは僕らの「手」がいくらでも可能性を生み出すことが出来るから。人間にとって手は、俊足の足よりも（車を開発してチーターを追い越した）、世界一大きいシロナガスクジラの体よりも（世界最大のノック・ネヴィスという船は全長458.45メートルもある）、大事な能力となったんだ。

ただ、体の部分としての手だけがあっても新しい道具は生まれない。立派な道具だけあっても使い方が分からなければ無いのと一緒に、豚に真珠、猫に小判だよ。自由になった人間の手は、好奇心という本能と一緒に初めて初めて効果を発揮する。考える脳がないとダメなことだ。

君はレゴブロックというおもちゃで遊んだことはないか？レゴは、小さいブロックを組み



小さいレゴパーツを組み合わせるとき、脳はフル活用されている。

合わせながら作りたいものを作っていく玩具なんだけど、これで遊ぶとたくさん頭を使う。こんなもの作れないかな？そのためにはどのパーツを組み合わせたらいいのかな？うーんうまくいかないな、こうしてみたらどうだろう？あれこれ考えて試行錯誤しながら一つの「作品」が出来上がる。レゴは手と好奇心を使って遊ぶ知育玩具として世代を超えて人気を得ている。

手を使うためには「これとこれを組み合わせてみたらどうなるんだろう？」っていう気持ち、好奇心がすごく大事だ。ただ設計図どおりに組み立てていても新しいことは生まれない。自分の頭で考えて、実際にやってみて初めて手は生きてくる。

だから手を使うともものすごく好奇心が刺激され、人間の脳を発達させていくんだ。物を自分で作り出す時にはメチャクチャ頭を使うもんね。僕は小学生の頃、学校の校庭に友達と「秘密基地」を作って遊んだ。適当なスペースを見つけたり、木の棒や石ころなど身の回りにあるものを組み合わせて装備を固めたりした。小学生だから機械もないし、電気も使えない。少ない休み時間を利用しながら「これは使えないかな」「こうしてみたらどうだろう」とみん

なで考えて立派な基地をつくった。これが昔のゲームとかがそんなに無い頃の話だと思っていいたら、僕の小学生の生徒も同じように遊んでるって話を聞いた。きっとこれは人間の本能なのかもしれないね。

秘密基地を作ったり、草や木で武器を作ったりするのは、実は原始人のやり方と一緒なんだ。原始人は洞窟などの洞穴に住み、木の棒と石を組み合わせて石器を作った。その石器を使って獲物を捕り、暮らしていたんだ。小学生と同じように機械も電気も無い環境で、原始人は何度もあれこれ考え、試しながら必死で生きていた。「うまくいかないなあ」という状況は人間が成長するためには絶対必要な試練だ。「じゃあどうしたらいいのか？」と考えなければいけないから。それはとても厳しく、辛いことだから、中にはすぐ手に入る答えを求めたり、考えることを止めてしまう人もいる。でもそれを考える時にこそ、人間の脳はものすごく活性化する。だから考えることを諦めてはいけない。

原始人がいた時代は、うまくいかない状況が長く続けば死んでしまう状況だったから、その活性化は並外れたものだった。彼らは急速に脳の進化を遂げた。その進化の甲斐があつて、1万年前の日本人は自分の体の何十倍もあるマンモスを捕って食べることも出来た。かなり頭を使わないと、そんなこと出来ないよね。こうして人間は「学ぶ」という能力を手に入れ

た。色々考えて新たな方法を発見して生きる道を生み出す。これが人が生きていくための最大の武器になった。だから学ぶという能力は今の人類だってもちろん持っている。僕や君もね。ただフル活用している人が少ないだけだ（泣）。

学ぶという能力をフル活用するためには「好奇心」という本能を使っていかなければならないんだけど、それをみんなサボっている。知識を楽に手に入れて、それを試すこともしないから段々好奇心は薄れていく。勉強がいつしか用語の暗記に形を変え、入学試験は学びの可能性を量る試験ではなく、単なる記憶力の試験になる。本当は知らないことでも言葉を知っていれば知ってるように感じてしまう。そしてその結果、みんな世の中を「知ったかぶった」大人になってしまったんだ。好奇心がなくなった大人は新しく知ろうとしないから学ぼうとはしない。僕は君にそんな大人になつてもらいたくはない。

好奇心はもちろん君にもある。（もしくはあったはずだ）図工や美術の時間に絵の具を色々混ぜてみたことはないか？結局どす黒い色になって虚しい気持ちになったね（笑）理科の実験で虫眼鏡を使った時には新聞紙を焦がして遊んでみたりしたよね？僕は友達と一緒に校庭にあったヘチマに火をつけて先生にぶっ飛ばされた（泣）

僕は好奇心だけは誰にも負けない子どもだった。テレビに磁石をつけちゃいけません、と

言われても「何でいけないんだろう？つけたらどうなるのかな？」って思ったから実際につけてみたんだ。そしたら磁石をつけたところだけが真つ黒なシミになってしまった。(がびちよびーん!) もちろんその後、父親にぶつ飛ばされたよ(笑) みんなそうやって色々試して失敗しながら世の中のことを知っていく。知識ばかりで頭でっかちになってもいけないし、実験ばかりしていても整理してまとめないと役に立たない。広く勉強した後は好奇心を使った学びによって未来を創り出すことが大事なんだ。

勉強して世の中のことを知り、生きる方法をたくさん知っていても、将来それが通用しない状況が発生するかもしれない。でも人間は自分の頭で考え、勉強したことを生かして新しい方法を編み出して危機を乗り越えていくだろう。それが勉強の先にある「学び」という力だ。だから君もまずは世の中を広く知り、昔の人や、今自分の力で生きている人の生きる方法を勉強しなければならぬ。そしてその後は、勉強を生かして君なりの生き方、生きる手段を学んでいかなければいけないんだ。

人間の最大の武器は好奇心だ。好奇心を使って学ぼう!

そして自分なりの生き方を発見するんだ！

3. 学びと戦いの歴史

一昔前、と言っても江戸時代まで遡るが、日本には士農工商という身分制度があった。武士を筆頭に農民、職人、商人と続くこの制度では、親の身分をその子が受け継ぎ、違う身分での結婚を禁じられ、転職もできなかった。

インドにはカースト制度という身分制度（バラモンを筆頭にクシャトリア・ヴァイシヤ・シュードラという、出生に基づいて決められる身分）が今でもあるし、同様の制度は今も昔も多くの地域に見られる。

南アフリカ共和国には、かつてアパルトヘイトという黒人を差別する人種差別制度があった。南アフリカには2500万人の黒人、490万人の白人がいたんだけど、白人は国土の13パーセントしかない不毛の辺境に黒人を居住させ、お店やトイレなど公共施設での差別



「この地域は白人の利用のみが保護される」と書いてある看板

を徹底した。集団地域法という法律の下、白人専用の場所がたくさん作られ、黒人の立ち入りを制限したんだ。また、雑婚禁止法という法律を作って、異人種間での結婚を禁止したり、背徳法といって黒人と白人が恋愛関係になるだけでも罰してしまうようなルールをつくった。

このような国のルール、つまり法律は白人が決めていた。国のルールは国会というところで、国の代表である国会議員が決めるんだけど、その国会議員に黒人はなれない。被選挙権という立候補する権利が無かったから。そして自分たちの希望する法律を作ってくれそうな人に投票することもできなかった。選挙権が無かったからだ。

こうして労働（就職や賃金）、教育、医療、結婚、宗教など、黒人の日常生活を厳しくさせるような差別政策が「法律」という大義名分の下に制度化されていった。さらにこういった制度を徹底するために警察や監視員の増加が必要となり、そのための予算を税金で賄った。なんと、驚くことに政府予算の半分近くをアパルトヘイト維持のために使っていたんだ。そのため国家の財政は傾き、税金を納める白人にとっても厳しい状況となった。そして少ない

国のお金を独占するために黒人が給与の高い専門職（熟練労働）に就くことを禁止したので、黒人は白人の10分の1程の給料で働いていた。国内の大半を占める黒人が「働けない」という状況はますます国を荒廃させた。その生活は非常に厳しいもので、白人との格差がどんどん広がっていった。このアパルトヘイトという制度は国際世論の批判と経済制裁などで廃止の方向に動いていき、1994年、全人種参加選挙によってネルソン・マンデラが黒人初の大統領になると廃止されていった。自分たちの手でルールをつくり始めたんだ。こうして南アフリカ共和国にやっと人種の壁が取り払われた。問題は山積みだが、アパルトヘイトによって遅れてしまった国の発展を、やっと国民全体が目指せるようになった。

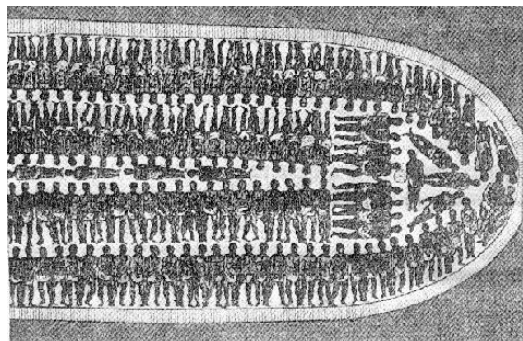
このように身分によって生まれながらにして人生が決められてしまうことが、歴史上数多くの国と地域で起こっていた。そしてそれは僕たちが知らないだけで、今現在も続いている。なぜ身分制度はいけなかわかるかい？

身分制度は人に序列をつけることで差別される階級（被差別階級）を生むんだ。一番上の身分があるということは、反対に一番下の身分があるということの意味する。例えば君が会社に入れば、最初は一番下っ端の新入社員から始まるだろう。一番下の君は先輩や上司の言

うことを聞かなければならない。時には嫌な仕事を押し付けられるかもしれない。でもそれは役職であって、身分ではないからまだいい。だって君が仕事を頑張ってどんどん役職が上がっていけば、いずれ一番下の時代が終わるから。でも、身分制度というものは君がどんなに頑張っても「君の人種は〇〇だから」「君の家は〇〇だから」という理由で、ずっと新入社員のままであることを命じられている制度なんだ。いや、実際新入社員なんかと比べ物にならないくらい厳しい状況を強いられる(泣)。そんなの絶対嫌だよな。

この身分制度、差別というものが人を人でなくしてしまう事態が起こった。それが「奴隷」という制度だ。

15世紀から19世紀前半にかけて黒人は奴隷として売買されていた。奴隷というのは人権を認められず、所有者の支配下に置かれ、自由を奪われた人だ。彼らは「商品として」売買された。自分を買った主人の下で命令に従いながら彼らはその生涯を閉じた。奴隷同士が強制的に結婚させられ、その子も当然のように奴隷となった。奴隷は制度として認められ、アフリカには銃を持ったスペイン、ポルトガル、後にイギリス、フランス、オランダの奴隷商人がやってきて奴隷狩りを行った。奴隷商人達は他の動物達と同じように人間を「奴隷」という身分で取引するルールを作り、巨万の富を手に入れた。奴隷貿易が行われていた期間



奴隷が運ばれた奴隷船の様子

にアフリカから連れて行かれた人は約1200万人といわれている。でもそれは実際に海を渡ってアメリカやヨーロッパに到着した人の数で、現地では殺害されたり、奴隷船と呼ばれる船の中で亡くなってしまった人の数はその5倍にも6倍にもなるといわれている。

働き手である若者を奴隷として失ったアフリカの多くの国は貧困にあえぐようになった。奴隷制度は「一応」世界的には禁止された。1948年に世界人権宣言が出され、その第四条には「何人も、奴隷にされ、又は苦役に服することはない。奴隷制度及び奴隷売買は、いかなる形においても禁止する。」と規定された。だが、制度上の奴隷が無くなっても、戦場で幼い子どもが軍隊やゲリラに強制的に投入されたり、暴力によって自由を奪われている「実質上の奴隷」になっている人は今も世界には約2700万人もいると言われているんだ。

なぜ黒人は支配されてしまったのか？それは西洋文明の方がいち早く「学問」を確立させ、「技術」を使い始めたからだ。イタリアで起こったルネサンスによって、ヨーロッパの人々は火薬（鉄砲や大砲に使われる）、羅針盤（航海のコンパスとなる）、活版印刷（本を広く多

くの人に普及させる)を製品化した。他の国で既にあつた技術を改良して、自分たちが使うことが出来るレベル、道具として利用できるまでに高めたんだ。この技術を持って、ヨーロッパ人は海に出た。大航海時代と呼ばれる、西洋人による世界制覇の時代が幕を開けた。ヨーロッパの国々は圧倒的な武力を背景にアジア・アフリカ・ラテンアメリカに植民地を開拓した。原住民達はその圧倒的な武力の前に屈服するしかなかった。でも実はその圧倒的な武力を生んだ学問や文明の差にこそ、ヨーロッパ人たちが各地の原住民を征服することを可能にした要因があつたんだ。だから僕は思うんだ。

もしも彼らが支配者達に抵抗する術を「学んで」いたら？

結果は変わっていたかもしれない。実際、奴隷制度下においては黒人が教育を受けることや、学問をすることは支配階級によって厳しく統制されたので、黒人たちは勉強することを許されなかった。こんなこと聞いたら勉強嫌いな人は「勉強しなくていいなんて超ラッキーじゃん！」て思うかもしれないけど、そうじゃない。勉強とは「生きる術を知る」ことだから、生き方を失ってしまった人たちは誰かに支配されて、文字通り奴隷として隷属していく

しかないんだ。だからそれを知っている支配者達は、奴隷達が学を身に付けて自分たちに抵抗することを恐れ、勉強からは遠ざける政策を行ったんだ。この例を見れば勉強するということがどれだけ重要かがわかるだろう。学びたくても学べないということが、どれだけ多くの人々を苦しめ、その人生を奪っていったかを考えれば、君が今「勉強しなさい」と言われる事がこれ以上ない幸せのように感じるんじゃないか（笑）。

現に今、アフリカやアジアなどかつて植民地だった国々は、恐るべきスピードで勉強を始めている。テレビの企画などで日本が発展途上国に学校を寄贈するなどして現地の教育を援助している様子も見かける。彼らは本当にうれしそうに学校で勉強している。これがきっと本当の勉強をしているときの顔なんだろう。日本人が受験のために忘れてしまった本来の勉強を不自由な環境で学ぶ子ども達が教えてくれている。

そしてアジア・アフリカの国々は、先進国がちよっと前にたどってきた道を駆け上がってきている。彼らは日本や欧米から技術を学び、自国の工業を発達させ、新商品を生み出し、経済的な豊かさを手に入れ始めている。かつての奴隷や植民地の時代があったせいで、何世紀も発展が遅れてしまったが、やっと今、彼らも先進国と同じ土俵で勝負に出ようとしているんだ。

だから彼らは勉強だけでは止まらない。勉強して世界の情勢を知った人々は、次々に勉強を学びに発展させていく。どうすれば国が豊かになるのか？ どういう商品を生産すれば売れるのか？ 自分の国にある原料資源はどう使えばいいのか？ それを考えていくことで新たな自分たちの「オリジナルな生き方」を編み出していく。そしてその学びが国を豊かにしていくんだ。彼らにはパワーと未来がある。僕らもウカウカしてはいられないぞ。

現代社会で国が発達していく一つのキーワードは経済だ。経済というのは選りすぐれた商品を開発して、国内、もしくは海外にたくさん売って利益をあげてを言う。この経済を制するものが世界を制するといっても過言ではない。

昔は、強い武器を発明した者が世界の中心に君臨することが出来た。強い船を作り、強い爆弾を作った者が領土を拡大し、大きな国を作ることが出来た。でも、今は違う。原子爆弾という人類最強の兵器が造られてから世界のルールが変わった。第二次世界大戦後の冷戦時代においてはアメリカとソ連が競って核を開発し、より強い兵器を開発することが世界をリードすることだったが、実際に原子爆弾や水素爆弾など、最強の兵器を開発することによって、人類は地球そのものを破壊できる力を手にしてしまった。地球そのものがなくなってしまうほどんなに強い武器を持っていても無意味だから、もう強い武器を開発する必要がなくなっ

てしまったわけだ。

また、どんなに強い武器を持っていても、人間の生きるというパワーを抑えることは出来ないことが証明されてしまった。第二次世界大戦に勝利した国々は戦後再びアジアの植民地に戻って支配を行おうとした。しかし、そんな戦勝国ですら、戦後の民衆の独立や自由を求める動きを抑えることは出来ず、それまで植民地にされていたアジア・アフリカの多くの国が独立戦争の末、独立、つまり自分の国を手にしたんだ。このような経緯から、もう誰かが武力で脅して植民地を作ろうと思ってもそれは難しいだろう。どの国の人々も「支配されずに生きる」ということを歴史的に勉強してしまったから。それでも支配しようとするればきつと人々は独立を守るために立ち上がるだろう。そうすると戦争となり、どちらの国の人も物資も犠牲になってしまはずだ。それは植民地を作ろうとする国にとっても利益のないことだからそんなことはやらなくなった。今はそれ以上に植民地支配を許さない68億人の世論が出来上がったから、どの国も植民地支配を作るための武力増強は行わないだろう。このようないふことも人々は武力による勝負ではなく、経済的な勝負に舞台を移していったことがわかるね。

もちろん武力の勝負が完全に終わったわけではないよ。一部の国は核兵器を保有しながら、

他の国が核を持たないように牽制している。また、地球そのものを破壊してしまおうという者が現れないよう、武力による統制も行われている。でもそれだけやっても国は発展しないことは明らかだ。産業を発達させ、よりよい商品を開発し、世界中で売っていかなければその国が豊かになることはない。さもなくば昔の日本のように国を閉ざして自給自足の生活にならなければ国民は生きていけない。ただ、これだけ高度にグローバル化（情報や交通によって国や地域の境界を超えて、「国」ではなく「世界」を基準に考えること）が進むと、よほどの少数民族でない限りは自給自足で国家を支えていくのは無理がある。江戸時代の鎖国は江戸時代の生活水準だから可能だったんだ。今やろうとしたら間違いなく破綻するだろう。身の回りの製品はほとんど「メイドイン海外」だろ？鉄も石油も肉や小麦などの農水産物も、日本だけでやりくりするには無理がある。やはり今の世の中、海外と貿易をしなければならぬ。それが僕らの国が生きていく手段だ。そしてあわよくば貿易で他国をリードし、経済的に豊かになっていきたい。その方法を考えるのが僕や君の使命だ。

そう考えたから近代以降ヨーロッパもアメリカも、そして日本だって、産業に力を入れて海外貿易で国の経済を支えていった。近代は産業だけやるわけにはいかず、武力によって無理矢理市場を開拓する動きもあったため、軍事力の開発にも各国が力を入れていた。そのた

め戦争と言う惨禍を免れず、せっかく築いた産業も一瞬にして灰となってしまふ国があちこちにあった。でも、強い武器を作つて武力で支配する時代はもう終わったんだ。（終わりにしたい！）もちろん今もまだ差別や他国の支配に苦しむ人々が、世界のあちこちで戦っている現状はある。でも、そんな彼らだつて、いつか戦いが終わり独立を勝ち取った後はきつと自国の産業を発達させ、経済という土俵で勝負してくるだろう。その時彼らはたくさん勉強してたくさん学ぶだろう。今は学びたくても学べない状況にいる人達が「学び」を手にし、自分達の足で歩き始めた時にこそ、本当の独立が生まれる。

世の中を知り、世界を知ろう！そして学びを武器に戦え！

勉強しない者、学ばない者は誰かに支配されてしまふ。

自分の足で立ち上がるんだ！

4. 日本流の勉強術、学び方を知ろう

日本もかつては身分制度の残る国で、学びたいと思っても自由に学ぶことはできなかった。「農民は農業だけやっていたら良い。商人は金儲けのことだけ考えていればよい。世界を知る必要はないんだ。」そう決められていたから、生まれながらにして勉強を強制される武士とは違い、他の身分の人は相当の努力がなければ学ぶことは出来なかった。でも日本の場合には学びを「禁止」されていたわけではない。ただ困難なだけで、それでもやってみようツワモノ達がいた。その人達をちよつと紹介しよう。

甘藷先生として知られる青木昆陽は江戸の魚屋の生まれだった。昆陽は勉強するために浪人となり、京都で学んだ。35歳の時にその勉強が認められ、時の江戸町奉行、大岡忠相（時代劇で有名な大岡越前だ）に取り入れられ、そこで幕府の書物を使って勉強しながら「蕃薯考」と言う書物を書いた。当時は米將軍と呼ばれた徳川吉宗が享保の改革を行っていたが、昆陽の研究は將軍吉宗の目にも止まり、將軍から直々にサツマイモの栽培を命じられた。サツマイモは元々は薩摩（鹿児島）の芋で、鹿児島で栽培されてたんだけど、鹿児島というところは桜島の火山灰の影響で土地が痩せてしまい、なかなか作物栽培が出来なかったんだ。

(シラス台地という)でも、そんな薩摩でも育つ芋があった。それがサツマイモだ！昆陽はそのサツマイモを紹介し、栽培方法を教えることで、米が不作の年、飢饉の年でも薩摩芋を食べて危機を逃れるようにした。昆陽が作ったサツマイモの試作品はやがて全国に広まり、後の天明の飢饉では多くの人の命を救ったんだ。その後昆陽は幕臣となり(なんと武士になった)、一生涯を勉強に捧げた。まさに学びが身分の壁を打ち壊した結果だ。

他にも江戸時代、学びが身分を超えた例がいくつもある。土佐藩の下級武士だった岩崎弥太郎は、ある時逮捕され牢獄に入れられた。(父親の無罪を願い出たら逮捕されてしまった)でも弥太郎はその牢獄で出会った商人に計算や商売のやり方を学び、商業に興味を持った。そして青木昆陽と同様に、弥太郎も勉強したことが土佐藩の首脳部に認められ、藩の仕事に任されるようになり、明治維新後の日本では船を使った海運業を始めて莫大な利益をあげた。弥太郎の会社は今でも三菱として残っている。そして金融、自動車、電気機器から不動産まで、あらゆる分野で活躍し、日本の産業を支えている。

他の国の例をいくつか見てきたけど、学ぶと言うことはこの日本でも自由と独立を手に入れるための大事な手段だった。「芸は身を助く」(一つでも優れた芸があれば、困った時に生きていくために役立つ、と言う意味)と言うことわざがあるけど、まさに『学は身を助く』

だった。どんな困難な中にあつても、情熱と好奇心で勉強し続ける人は身分という運命ですら変えていく。だから僕が何度も言う様に、生きるためには、勉強し、学ぶべきなんだ。日本人は勤勉で働き者だと言われるが、その所以は正に「日本人は勉強が好きだ」という、この点にあるんだと僕は思う。そんな勉強好きなはずの日本人が今や勉強することを忘れてしまい、単なる点数のための暗記に躍起になっている。僕はそれを何とかしたくてこの本を書いてるんだ（意外に誰もその本質には気付いていないからね）。

過去の歴史を見れば、数々のピンチを人々の「学び」によって切り抜けていった例がいくつもある。その中でも最大のピンチが江戸時代末期の外国船の来航だ。押し寄せる海外勢力に、日本は国をも失いかねない状況を迎える。でもその時、日本の人々は誰もが身分を超えて広く世界を勉強し、それぞれに熱く天下国家を論じた。それぞれが日本の歩む道を考え、学び抜いて日本の生きる道を生み出すことよって危機を乗り越え、日本は近代国家として生まれ変わった。それが明治維新だ。

江戸時代の幕末、ペリーというアメリカ人が日本にやってきて、それまで外国との付き合いをしていなかった（鎖国していた）日本に開国を迫った。外国船の来航や通商の要求はそれまでにもあった。その度に江戸幕府の首脳陣は何度も開国を拒否してきたが、1853年



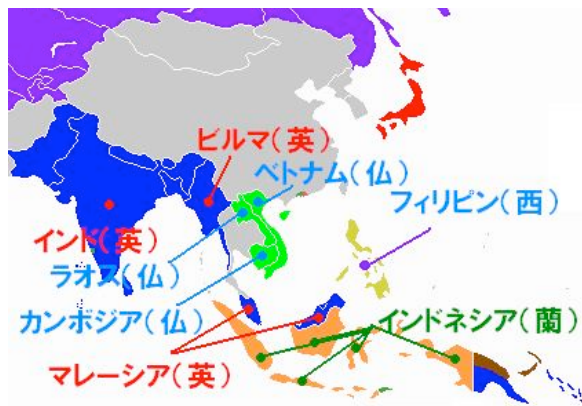
ペリーが乗ってきた船、サスケハナ号は「黒船」と呼ばれ、日本中の人々を驚かせた。

にペリーが黒船を率いて浦賀にやって来た時には、もうそれを許さない程に世界の情勢は変わっていた。

産業革命によって最先端の技術を実用化したヨーロッパ人は、海へ出て、はるか遠いアジアの国々を植民地とし、自国にそこで取れた物資を送るといふ植民地貿易を行っていた。ペリー来航の十数年前には、お隣の中国（当時は清といった）がアヘン戦争によってイギリスに敗れ、領土の一部を植民地として獲られている。それだけじゃない。中国以外にも1885年までにアジアのほとんどの国がヨーロッパ諸国の植民地となってしまうている。

植民地になるとどうなってしまうのか？

まず、植民地は本国の支配を受ける。植民地は自由な貿易を禁止されたり、本国のための作物栽培を義務付けられたりするから、これじゃあ産業は発達しない。また本国から来た人々は安い賃金で現地人を雇い、利益の大半を本国の人が受け取る。現地人に払われるわずかな賃金ですら税金という名目で回収し、本国に送っていたから、植民地になった国は本国の経



1885年頃のアジアの植民地

済的利益のために搾取され続けた。前に紹介した奴隷制度では人を強制的に本国へ連行して働かせていたが、この植民地制度は奴隷制度を現地で行っているようなもので、アフリカ同様アジアの人々も長い間この植民地支配に苦しむことになった。

同じ人種であるアジアの国々が次々とヨーロッパ諸国に屈し、植民地化されていく状況の中、「このままでは日本も同じように外国人によって支配されてしまうのではないか？」という不安が日本の中の誰の胸にもあった。江戸幕府は打開策を見つけられないまま外国の圧力に屈して鎖国をやめ、開国に踏み切ってしまうし（日米和親条約、日米修好通商条約）、それに反対する尊皇攘夷派の武士達は外国人と玉砕（全滅）覚悟で戦争をしようと活動し始めてしまう。江戸幕府の間達は欧米の力を目の前で見せ付けられていたから、圧倒的なその武力を前に今の日本は手も足も出ないことを知っていた。だから幕府は不用意に外国を刺激する攘夷派の武士達を安政の大獄で弾圧したんだけど、そうすれば逆に攘夷派の武士達も幕府の実権を握る大老井伊直弼

を暗殺してしまう（桜田門外の変）など、日本は対外的にも国内的にも大混乱に陥った。日本の事を本気で考える日本人達が、日本が生きる方法をめぐって国民同士で戦い命を落とす。その隙を欧米諸国が虎視眈々と狙っている。まさにそんな時代だった。

そんな状況を打開したのは、二十代から三十代を中心とする若い維新の志士達だった。彼らは開国後、各地の私塾で世界を学び、それまでになかった新しい方法を考えた。日本が外国の支配下に置かれることなく、独立と自立を保ったまま海外諸国と競争していくには、まずは今の農業主体の経済を根本から見直し、工業を中心とする国内産業を発達させ、外国の軍隊に負けない軍事力を身につけるしかない。そんな国を目指して彼らは開国後、それまでの日本がやってきた制度を一新し、短期間のうちに欧米列強に肩を並べる国家を創った。スローガンは「富国強兵」。文字通り、誰にも支配されない強い国と豊かな国を目指した。それが彼らが学び抜いた末に見つけた方法だったんだ。

彼らの働きによって日本は農業国から工業国へと変化を遂げ、明治以降生糸と綿製品では世界一の輸出量を誇った。また1904年の日露戦争では白色人種であるロシア人と互角に戦い他のヨーロッパ諸国を驚かせた。スローガン通りの国づくりがなされていったんだね。その後も日本は独立を守り続け、黄色人種で唯一国際連盟の常任理事国になり、当時は当た

り前とされていた有色人種（黒色人種、黄色人種）の差別廃止を提案した。この提案は否決されてしまったが（多数決では11対5と賛成多数であったが、アメリカの急な全会一致条件によって否決されてしまった）、日本は国際舞台で自分の意見を言える国になった。ペリーの来航から始まり、明治時代を通じて行われた明治維新はこのようにして成し遂げられたんだ。

彼らの偉業は今でも語り継がれ、多くの政治家が（内容はともかく）維新の志士達に自分をなぞらえているし、君達の中にもきつと幕末のヒーローに憧れている人がいるはずだ。それ位彼らは尊敬され、愛されている。

でも、僕が注目したいのは彼らが成し遂げた偉業にはない。僕が君に教えたいのは、この時代を動かした明治維新の志士達は、必ずしも地位や家柄がある人たちではなかったという点だ。坂本龍馬も西郷隆盛も木戸孝允も、元は何の権力も持たない下級武士の一人だった。何でそんな彼らが日本を、時代を動かすことが出来たのだろうか？

僕は思う。それはきつと彼らが生まれてからずっと自分の身分に悩み、苦しみ、世界を知ることに関えていたからだ。だから彼らは開国するやいなや、アメリカやイギリスという「未知の」国の制度、産業、言語、文化、歴史など、それまで考えもしなかった異世界の人間達

がやっていることに興味を持ち、夢中で勉強したんだ。

欧米人はメチャクチャ強かった。それはなぜか？

欧米人は広い世界を知っていた。どうしてか？

彼らはそういうことを考え、本を読み、議論することで、広い世界の中で生きていく方法を知り、そうやって学んだ事が国を動かしていけるといふ事に気付いた。きっと彼らはうれしくて仕方なかったんだろう。

「アメリカすげえ！イギリスすげえ！」

その驚きは国を閉ざし、固定された身分に置かれている状況では、絶対に得られなかったものだ。彼らは藩という狭い考え方を壊し、日本人として外国と向き合うことで自分たちの身分さえも解き放つていった。

だから幕末の志士の中には学びに「熱い」人達が大勢いた。その中でも僕が最も好きな二人を紹介しよう。坂本龍馬と吉田松陰だ。

土佐藩の下級武士として生まれた坂本龍馬は剣の修行のために江戸に行き、その時ペリーの乗ってきた黒船サスケハナ号を見る。誰もが黒船の威力に恐れているとき、龍馬は「この



下級武士だった坂本竜馬は多くの専門
家から世界を学び、日本を動かした。

(上野彦馬写真館にて井上俊三が撮影。)

龍馬はまずは同じ土佐藩の河田小龍という絵師からジョン万次郎の話聞きに行くんだ。ジョン万次郎といえば日本で初めてアメリカに上陸した人物だ。貧しい漁村に生まれた万次郎は14歳の時に初めて漁に出たが、海で遭難し漂流

船を何とかして造れないだろうか？」と考えた。驚くべき好奇心だ。そして、その時から龍馬の勉強が次々と芽を出し始める。

どうやったら黒船を作れるだろう？

いや、その前にどうしてアメリカはこのような船を作れるのだろう？

いやいや、アメリカという国は一体どのような国なんだろう？

いやいやいや、そもそも世界にはどんな国があるんだろう？

考えれば考えるほど疑問が生まれる。そこで龍馬は当時「世界を知る」者に次々と会いに行き、教えを願った。「分からないことがあつたら、聞く、見る、調べる」。勉強の基本だね。

してしまふ。そこを運良く通りかかったアメリカの捕鯨船に救助され、そのままアメリカ人の養子としてアメリカで生活をし（アメリカの学校を卒業し、ゴールドラッシュのカリフォルニアで金を掘ったりもしたんだ）、その後日本に帰国した。（有名なABCの歌は万次郎が日本に紹介したんだよ。）

当時の日本では貴重な「アメリカ帰りの帰国子女」であつたジョン万次郎の話は龍馬の「どうして？」にダイレクトに突き刺さつた。地球儀片手に日本の小ささと世界の大きさを語る小龍に、龍馬は胸を躍らせていた。そしてその後も佐久間象山やその弟子の吉田松陰などに会いに行き、世界を知るといふ勉強の歩みを止めなかつた。龍馬は分からないことがあると、「ちつくと教えてくれんかのお」といつて突然現れ、熱心に話を聞いて帰っていく、そんな人物だつたそうだ。

そして龍馬は幕府の軍艦奉行、勝海舟と出会う。龍馬は一応尊皇攘夷派の志士だつたから開国を唱える幕府とは敵対関係にあるはずなだけども（実際に幕府の新撰組には命を狙われていた）、海舟も龍馬も黒船と呼ばれる蒸気船を運転する夢は同じだつたから、そのためにはいがみ合う必要はないと思つたんだろう。龍馬は海舟に弟子入りし、海舟が作つた神戸の海軍操練所で念願の黒船を運転するんだ！

船の操縦法を学んだ龍馬は、その船を使って何かをしようと考えた。そして日本初の貿易会社である「海援隊」（元は亀山社中）を結成し、海運貿易業を始めた。物資を安く買い付け、それを必要とする場所へ届けて利益をあげようと言うのだ。日本は島国だから船を利用すれば早く大量の物資を運ぶ事ができる。そう考えた。それは、まだ藩と言う、国の中に国があるような時代では思いも寄らない事だった。龍馬は誰もが「〇〇藩」と言う時代に「わしは『日本人』じゃき」と言っていた。これは藩や身分に関係なく、「国民」として誰もが天下国家を議論すると言う、正に民主主義の考え方だ。かつて色々な人の下を訪ね歩いて勉強したアメリカやイギリスのことが、今や龍馬の行動や生き方にもはつきりと表れている。蒔いておいた種が、少しずつ芽を出し始めたんだ。

「カンパニー（会社）を作るがぜよ！」

そう言った龍馬はとうとう本当に黒船と呼ばれる蒸気船を手に入れた。本当にすごいよね！そして蒸気船を手にした龍馬の頭には一つの道が見えた。同じ日本人が幕府だ尊皇攘夷だと争わず、みんなが協力して、豊かな国を作ろう。強い海軍を作って欧米列強と対等に渡り合っていける国を作ろう。それが龍馬の考えた日本の生きる道だった。日本人としての自覚を持ち、欧米と同じように蒸気船を操る龍馬だからこそ考えられた方法だ。好奇心の赴くま

まに世界を勉強し、自分の進むべき道を学びによって開拓し、そしてそれが将来の夢である「志」となって国を動かしていく。これが「生きる」ということだ。龍馬は熱く学び、熱く生きた。

龍馬は日本を一つにするため全国を駆け巡った。当時幕府に対抗できる力を持つ藩は少なく、その最有力と言われる薩摩藩と長州藩はいがみ合っている状況だ。この状況を打開すべく龍馬は西郷隆盛、大久保利通（薩摩藩）とも木戸孝允、高杉晋作（長州藩）とも粘り強く交渉した。薩摩も長州も多くの若者が日本を守るために命を落としている状況なのに、お互いのプライドが邪魔をして手を組めない。そんな両藩を龍馬は叱る。

「薩摩も長州も他の藩も、どれだけ多くの人間が日本を守ろうとして命を落としたか、知っちよるじゃろうが！あんしらはみんな志半ばで倒れていったがじゃ。後に生きるものに志を託してのう。それをおまんらは、いつまで藩の対面なんぞにこだわつちよるがじゃ！」

そしてとうとう薩長同盟を結ばせた。一人の何の身分もない日本人坂本竜馬が国の運命を決めた。明治時代になるわずか2年前のことだった。

薩長同盟は結ばれた。しかし龍馬の想いは別のところにあつた。龍馬は幕府を武力で倒して政権を奪うのではなく、幕府も含めたオールジャパンで国づくりをする事を目指していた。

薩長同盟を結ばせた張本人である龍馬が、薩長の倒幕を正にその時になって「大政奉還」と言う案で潰したのもそのためだった。薩摩や長州は武力で幕府を倒すことばかりに目が行き、その後の新国家についての構想を示さなかった。龍馬は最初からその道が見えていたから、自分の理想とする日本の未来を八つの政策に書き留めていた。船中八策と呼ばれる国家の基本方針だ。そこには「議会を作って政策をみんなで話し合うこと」「海軍力を増強すること」「憲法を制定すること」などが記されていた。そんな龍馬の考えを、竜馬に惚れた地位のある人達が実行することによって、日本は身分のない独立と自立の国へと大きな変化を遂げた。薩長同盟、大政奉還、龍馬が国を動かしたんだ！

僕が龍馬を好きなのはここからだ。それだけの事を行った龍馬は新政府の役人の構想案を作ったが、そこに自分の名前は無かった。それを見た西郷隆盛は龍馬に訊いた。

「坂本さあ、こん中におまんさあの名前が落ちちよつど。」

龍馬は言う。

「わしは役人にはならん。毎日同じ時間に家を出て、同じ時間に家に帰るんちゆうは性に合わんきに。」

「ならば坂本さあは何をやられもすか」と訊く西郷に龍馬は言った。

「そうさな、世界の海援隊でもやりますかいのお」

龍馬はずっと同じものを見ていた。世界を勉強している時も、軍艦の使い方を学んでいる時も、薩長同盟や大政奉還を画策している時にも。龍馬はただひたすら「生きる」という事を考えていた。自分だけでなく日本の誰もが身分に苦しむことなく、外国の圧力に負けることなく生きることだけを考えていた。龍馬にとつては生きる事は学ぶ事で、学んだ事は次々と手段として使つていった。龍馬は32歳の誕生日に暗殺されこの世を去ったが、龍馬の生きた証は今もこの日本に根付いている。僕は坂本龍馬という人物が日本で一番熱く勉強した人だと思つている。だから僕も龍馬に惹かれ熱い勉強をし続けている。そしてこうして君に龍馬を紹介する事で、君にもその熱い想いを吹き込もうとされているんだ。僕も君も、龍馬の志を受け継ぎ、熱く勉強していこうじゃないか！

もう一人、吉田松陰という男がいる。松下村塾を開き、幕末の志士を数多く輩出した吉田松陰もまた下級武士の出身だった。松陰の家は武士といえども農業をせずには生きていけない農民以下の生活をしていた。吉田松陰の父は同じ苦しみを子どもにはさせまいと、学問で身を立てるよう徹底的に勉強させた。その甲斐あつて松陰はわずか11歳で藩主毛利敬親に

講義を行う程に成長した。松陰は最初勉強を嫌々やっていたが、長州藩校明倫館の先生に借りた一冊の本によって「世界」を知ると、龍馬同様、好奇心の赴くままに学びを開拓していった。22歳になった松陰は江戸に出て最先端の洋学を学んだ。そしてそれまでの学問では新しい世の中を切り開くことは出来ないということを知ってしまう。そこで幕府のやり方を堂々と批判する洋学者佐久間象山に弟子入りし、日本の行く道を探し始めたんだ。

松陰はすぐに江戸を飛び出し東北へ向かう。藩の許しが得られないままでの旅は脱藩という死刑にもなり得る大罪だったが、それを覚悟してまで松陰は自分の目で確かめたかったんだ。そこまでして松陰が見たかったものは、黒船だった。人に聞き、本で読み、頭では分かっているだけでは足りないもの。それが「体験する」という勉強だ。松陰は実際に自分の目で見るために命を賭けた。この旅では外国船を見る事はできなかったが、松陰の心には大きな学びの種が植えつけられた。

一つは外国船が近づき、隣の中国は武力に屈しているという状況を知りながらも幕府は何の手も打たず、海岸は無防備となつていることを知った事だった。これに松陰は怒りを露にする。もう一つは東北の行く先々で見える鉱山や農村の疲弊した人々を見た事だった。衰え死んでいく人々の姿に、「これは日本を変えなければいけない」という使命感を抱くようになって

た。松陰は幕府の言いなりになっていては「生きて」いけないと、身の保全を捨てても自分の信じる道を貫こうとした。それが正に「生きる」ということだった。

そして松陰は、その使命感から日本を変える新しい方法を探すべく、外国に渡ろうと考えるようになる。新しいことを知りたくて、知りたくて、松陰が採った手段はなんと密航だった。1854年、日米和親条約を結びに下田に来たペリーの船に、松陰は夜中こっそりと近づき「アメリカに連れて行ってくれ」と密航を頼んだ。ものすごい好奇心だ！しかも命がけの。でも結局それは断られてしまい、さらにその密航を自首した松陰は牢に入れられてしまう。密航は脱藩よりも重い罪。死刑は免れない状況だった。でも、ここからが松陰のすごいところだ。

なんと松陰はその獄中で囚人達を相手に勉強をし、授業を行ったんだ！それはかつて学んだ中国の故事にあった話と正に同じだった。

中国の前漢時代、牢獄につながれた黄覇という人が牢屋の中で儒学者の夏侯勝と言う人に教えを願った。

「どうせ死ぬのになぜ君は学ぼうとするのか」と問う夏侯勝に黄覇は言った。

「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり（儒学の創始者、孔子の言葉）。

人としての道、自分の生きる道を知って死ぬのと知らずに死ぬのは違うんだ。どうせ死ぬなら僕はその道を知って死にたいんです。」

そう言つて黄覇は牢獄で勉強を始め、その後夏侯勝と共に罪を許され、役職をもらつて活躍するまでの人生を送つた。この話を松陰は昔学んでいた。

そして同じように死を待つ囚人達に松陰は言つた。

「生きる事を捨ててはいけない。たとえその身は死すとも、生きる意味を知つて死ぬのと知らずに死ぬのでは全然違うんだ！」

松陰の呼びかけにその日から獄中での学習会が始まつた。それぞれが知っている事を教え合ひ、牢の中は生き生きとしてきた。なんと牢屋の番人までが松陰に弟子入りし、牢の中にいる松陰から授業を受けたという。吉田松陰という人物もまた、熱く、本当に熱く勉強して生きる方法を見つけた人だったんだ。

その後松陰は長州藩に戻つて塾居（自宅で謹慎し、外出も面会も禁じられる刑罰）を命じられる。そしてそこで開いた私塾が松下村塾だ。松下村塾はたったの2年間しか授業を行わなかつた。でも、松下村塾は瞬く間に長州藩中の才能ある若者を集めるようになった。それ

は松陰が武士だけでなく身分に関係なく塾生を受け入れたり、その授業が教室の中だけでなく、登山や水泳、農作業なども行うなど、生徒達にとって松下村塾には「生きる」学問があったからだ。松陰は塾生たちに一方的に教えるのではなく、時に生徒達と熱く議論し、時に生徒達と一緒に日本の行く末を考えた。先生というのは何でも知ってる神様じゃない。何か物事にぶつかった時その答えを教えるのではなく、その問題にどう対処していったらいいかという生き方を教えるのが先生だとぼくは思っている。だから僕は今、まさに君達が生きていく上で問題にぶつかったとき、そこから逃げずに勉強してきた知識を活かして君達が「生きて」いけるように勉強とは何かを論じているんだ。「答えは自分で見つけるものだ。」龍馬や松陰から学んだ中村雄一はそう君に伝える。僕は僕の、君は君の生きる道をお互い見つけていこう。

松陰は「学問とは『人間とは何か』を学ぶことである」と言った。また「学者になつてはいけない。実行しなければならない」とも言っていた。頭でっかちでは現実は何も変わらなない。学んだことを実行する力が必要だ。松陰の教えはまさに「生きるために必要な勉強」だった。松下村塾からは明治維新に大きな影響力を与えた久坂玄瑞や高杉晋作、そして後の総理大臣になった伊藤博文、山県有朋など多くの志士が出ている。若干30歳の若者がさらに

若い未来の種を育て、やがて日本は彼らの手によって変わっていった。本州のはずれ、山口県の萩にあった小さな塾で熱く語った日本の未来予想図が、その志を継ぐ者達によって現実のものとなった。何の権力も持たない青年達が本気で自分と、自分のうまれた国の未来を考えた結果だ。だからこそ、国は、時代が動いたんだ。

松陰は30歳という若さで処刑された。その後久坂玄随は禁門の変で戦死し、奇兵隊を考えた高杉晋作は病気の為明治の世を見ることなくこの世を去った。それでも残った者達によって明治維新は成し遂げられた。外国の植民地になることなく、アメリカ、ヨーロッパの進んだ学問を取り入れながら、急速にグローバルスタンダードに乗っかっていったんだ。松陰たちが思い描いて学んでいた日本の姿がそこにはあった。

何度も言うが世の中を知らなければ、より力のあるものに支配されてしまう。だから勉強して世の中のことを知り、生きていく方法を知ることが必要なんだ。勉強をすれば、より進んだ技術や方法を知ることができる。それを真似れば自分も同じように発達、発展していきるんだ。それだけじゃない、さらに他国の真似をしながらそれを学問として体系化し（一つにまとめて）、アレンジしていけば、新しい技術を生み出すことも可能になる。そうすればそ

の国の未来はきつと明るいものとなる。人間とはそう生きていくものだ。そして日本人はそうやって生きてきたんだ。

「おもしろき こともなき世を おもしろく すみなすものは 心なりけり」

高杉晋作は最期にこんな歌を残した。勉強とは、世界を知るとは、「関係ないから」と無視するものでもなく、嫌々勉強していくものでもない。全ては自分が熱く生きるため、自分の人生を面白くするためにあるんだ。

明治維新によって欧米列強の仲間入りを果たした日本は、最初こそ欧米の真似をし、必死に世界を勉強していたが、その後はその技術をうまく組み合わせて新技術を次々と開発した。ほんの数十年の間に、ヨーロッパがそれまで何百年もかけてたどり着いた文明を日本は手に入れた。それは絶対に日本の「勉強する力、学ぶ力」があったからだ。

自動車のトヨタは明治時代に豊田佐吉が豊田式力織機を発明したことに始まる、元々は織物の器械を生産する豊田自動織機製作所という会社だった。そして佐吉の子どもである豊田喜一郎が自動織機の特徴をエンジンに転用して、昭和の初めにトヨタ自動車工業株式会社を設立、世界でも通用する自動車会社を作った。実際にトヨタは2007年には自動車の生産台数が世界一になり、2008年には販売台数でも世界一の座に就いた。トヨタからは代々

受け継がれてきた学びが時代を超えて世界に通用していった流れを見ることが出来る。

そしてトヨタが自動車を初めて作った頃、本田宗一郎という人物もその学びに魅せられた。自動車の修理屋だった宗一郎は、出張で消防車を直しに東北の岩手県盛岡まで行き、そこで自分が大好きで磨いてきた知識と修理の腕がたくさんの人の役に立てる事を知った。そして宗一郎はさらに自動車の学びを深めていく。ピストンリングの開発のために自分の知らなかった鋳物と言う分野を学び、31歳で浜松高等工業学校にも通う。自分の目的のために学んだ事を生かす、そのために足りない分野があれば勉強する、宗一郎は本当の学びを知っていた。終戦後、宗一郎は無線機のエンジンを活用してエンジン付き自転車、オートバイを開発したり、自分でそのエンジンを開発した「ドリーム号」を世に送り出した。そして1958年、ホンダは誰でも気軽に乗れるオートバイ、スーパーカブを作った。これは今でも新聞配達や出前などに使われている、安全で乗りやすいバイクだ。その後ホンダは車の分野でも世界で初の低公害エンジンを開発し、世界にその名を轟かせた。日本の技術者達は日々勉強し、腕を磨き、それを生かす道を見つけていった。日本が経済大国と呼ばれたのは自然の成り行きではない。そのずっと前からコツコツと、ワクワクと、学び続けた多くの人達によって導かれた結果だったんだ。

その力は今も脈々と受け継がれている。日本の電気会社は省エネ技術では世界でもトップの技術を持っている。省エネ洗濯機を調べればパナソニック、三洋電機、東芝、日立など、大手のメーカーはみんな省エネに力を入れているし、省エネテレビを調べるとソニーやシャープなども同様に環境にやさしい商品を作っている。日本製品は世界でも高い評価を受け、その性能の良さは折り紙つきだ。やはりその裏には日々努力を重ね勉強してきた人々がいるんだ。日本という国は、そんな人々の支えによって今まで長きに渡って存在してこれたんだ。

生物の歴史、人類の歴史、そして日本の歴史を振り返ってみて分かるように、僕も君も生きていくためには学ばなければならない。学びを止めてしまえば誰かに支配されるか、生きる手段をなくして死んでしまうか、民族全体が滅んでしまうかのどれかだ。学びの道を止めてはならない。生きていく限りずっと。

学ぶ事は人間の最大の武器だ。学ばなければ支配されるか死んでしまうか。どちらにしても滅びてしまう。

勉強しよう、そして、自ら学ぼう！

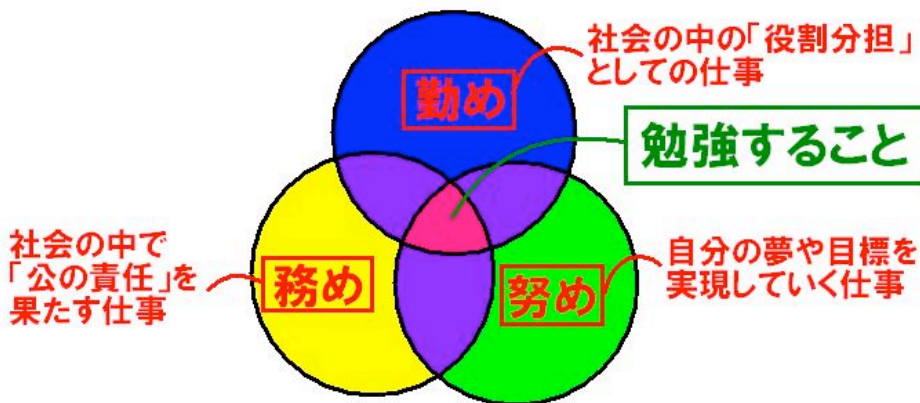
5. 働くということ

「勉強」、そして「学び」、生きていくために人は誰もが勉強し、学んでいかなければならないと説明してきた。

勉強すると言うことは、世の中のことを知る事だ。つまり「自分以外の他人と、他人の創る世界」を知ることだ。人間は、無人島で家も服も食べ物も全部自分で自給自足しない限り、一人では生きていけない。みんな誰かの助けを借りて生きている。だからいつか君も誰かを助けて生きていく。そのためには自分以外の「他人」を知る事が必要なんだ。それが勉強と言うものだ。

そして、世の中を知った後、人は何らかの道をもつともつと追究して、磨いていく。それが「学び」だ。パンを焼く、商品を輸入する、服をデザインする、野菜を作る、物を製造す

仕事の3要素



る・・・どんな分野でもいい、興味を持った道をとことん突き詰めていく。そうして、それがやがて自分の生きていく道、「仕事」になつていく。だから人が「生きる」ということは勉強をして、その道を学び、そして仕事をしていくってことなんだ。

世の中ってヤツは、そうやって誰もが自分の仕事をする事で回っている。最初に「勉」の話をしたのを覚えているかな。「つとめ」とは職業としての勤め、社会の中での責任としての務め、自分の夢や目標のための努め、の3つがあった。

つまり仕事と言うのは、職業としてお金を得て、親として大人として、社会の一員として働いて、その上で自分の夢を実現するって事なんだ。

例えば世界中の病気で苦しむ人の命を助けたいと思ってる人がいる。その人は「医者」と言う職業を選ぶだろう。そして毎日患者さんを診る事でその夢を実現していくはずだ。その仕事をしていればお金ももらえる。そのお金でご飯を食べたり服を買ったりして生活

する。でも、その人は「世界中の病気で苦しむ人の命を助けたい」という夢を実現するために、もつと何かをしたいと思うだろう。病気を防ぐための勉強会などを地域で行ったりするかもしれない。またはもつと色んな病気を研究しないとけないと言って、アメリカに留学してしまうかもしれない。その過程では、恋をして、結婚して、子どもが生まれて愛を知る事もあるだろう。子どもへの愛情を改めて実感した彼は、国連のユニセフ活動を支援するかもしれない。そうやってその人は夢である「世界中の病気で苦しむ人の命を助けたい」を実現していく。

この例から分かるように「働く」には

- ・ お金を得る ↓ 他人に自分の仕事を買ってもらう
- ・ 誰かを助ける ↓ 自分の仕事有谁かの役に立つ
- ・ 夢を実現する ↓ 自分の目標や夢を実現させる

という目的がある。人は勉強し、学びを経て仕事を始める。職業に就き、お金を稼いで生活をする。社会の勤めを経て、一人前の大人として助け合って生きていく。そして仕事を通じて、自分がこの世に生きた証としての夢や目標を実現していく。それが働くことなんだ。そしてその根底には常に「勉強」があるんだ。

結局勉強ができないと（ここで言う勉強は学校の勉強だけじゃないよ）、誰かの役に立つ事は出来ない。どれだけ「人の役に立とう」という気持ちがあっても、そのやり方を勉強しなければ人を助ける事は出来ない。人の生命を救うためには生物の体、その機能や役割、薬の種類と効能など色々な事を勉強しないといけないよね。

それに勉強をしないとお金を稼ぐ事も出来ない。「別に俺はサラリーマンでいいですよ」という人だって、その会社の商品の勉強をしなければ商品は売れない。

社員「お客さん、今回我社から新商品が発売されました。今回のはすごいですよ！」

お客「どういうところがすごいですか？」

社員「スーパーパワフルワンドルセンサーが内蔵しているんです！」

お客「それってどういう機能なんですか？」

社員「え、えーっと・・・とにかくグレイトなんです。みなさん満足しています！」

お客「その機能はどうやって使うんですか？」

社員「たしかここを、あれ？おかしいな。ここかな・・・？うーん。ちよっとお待ちを。」

お客「あ、もういいです。」

社員「あ、おきやくさーん・・・（泣）」

サラリーマンと違ってイメージする販売や営業の仕事は、実はものすごい勉強が必要な仕事だ。だって「ウチの商品は他社の商品と比べてこういうところがいいんです！」と奨める事ができなければ、お客さんは絶対お金を出して買ってはくれない。商品が売れなければ会社は倒産してしまう。お金を稼ぐには相手が何を欲しがって、どういう勧め方をすれば買ってくれるのかを、広く勉強していかないといけないんだ。

そして勉強しなければ夢も叶わない。「俺はミュージシャンになる」という夢があったとする。ミュージシャンと言う職業は大勢の前で自分の歌を聴かせ、お客さんに感動を与える仕事だ。無人島で一人で歌っていたいわげじゃない（笑）だから「言葉」や「想い」を詞に込める方法を学ばなければいけなし、メロディーや楽器の弾き方、発声の方法を勉強しないと完成度の低い歌になって、誰も聴いてはくれない。毎日有名なミュージシャンの曲を聴きまくって、毎日スタジオで演奏しまくって、歌いまくって、路上でライブをやってみてお客さんの反応を確かめて・・・本当に色んな勉強がそこにはある。学校で教えてくれないだけに、自分でその道を開拓してかなければならないから、面白くも厳しい勉強が待っているんだ。

このように働くと言う前提には必ず勉強がある。もう生きていくということ自体が勉強だ

と言う事はわかっただろう。勉強なんかしたくないという君、観念しなさい(笑)

でも、働くのは実はメチャクチャ面白い事なんだよ。だって数ある仕事の中で「好きな事」をずつとしていられるんだから。ゲームがメチャクチャ好きな人がずつとゲームを作ってられる。お菓子がメチャクチャ好きな人がずつとお菓子の事を考えていられる。そして勉強がメチャクチャ好きな人がずつと勉強していられる(笑) もちろんいいことばかりじゃないけど、それでも自分が好きな道ならばずつと頑張っていけるし、そのための勉強は決して苦にはならないと思うんだ。僕が年間約350日位働くのも、この仕事「好き」だからだ。毎日夜中まで働いて、国語に英語、数学も理科も社会も毎日10時間以上勉強するなんて、好きじゃなきゃやってらんないよ(笑) どうせ働かなければ生きていけないんだったら、好きな仕事、やりたい仕事で働きたいよね。自分は何をやりたいのか?そもそもどんな仕事があるのか?本当にそれが好きなのか?その答えが日々の勉強の中に隠れているんだ。だから、いっぱい学校で勉強して、いっぱい友達と遊んで、いっぱい恋をして、色んな経験の中で勉強して欲しいんだ。

どうだろう?少しは勉強や仕事のイメージが変わってきただろうか?「働く」って言う「お金を稼ぐ」という目的にばかり目がいつてしまいがちで、「仕事なんて就職すればできる

でしょ」と思ってる人も多いはずだ。でもそれは本当の仕事ではない。お金をもらう事だけなら、どこにだって就職すればできるけど、「務め」も「勤め」も「努め」も実現していくにはそれだけじゃ足りない。仕事をするのにはもっと大事な土台が必要なんだ。それは何か？

自分の好きな分野を生かして、他人に感謝を与える事

これが仕事をする上で一番大事なんだ。

後で説明するけど、世の中はみんな仕事の役割分担で回っているんだ。自分ができない仕事は誰かに頼んで、人々は生活している。だから働くにはまず自分の好きな事を見つけてなければならぬ。それは説明したとおりだ。得意なもの、好きなものを磨いて人に負けない位に高めたものが仕事になる。でもそれは決して自己満足では終わらない。仕事と言うのは相手がいて初めて成立するものだからだ。

社会人になって会社で働く時には新人研修といって、これからこの会社でどんな風に仕事をしていくのか、その心構えみたいなものを勉強するんだ。多くの会社では社会人としての心構えとして「サービス重視」「顧客重視」の精神を教える。会社と言うのは顧客のニーズに

迅速に対応して商品開発をしたり（要はお客さんの欲しいものを作るって事）、顧客サービスの向上に努めたり（お客さんが満足いくようにするって事）して利益をあげている。だから「自分以外の誰かの役に立って利益を得る」という点を忘れてはいけないうってことだ。それを新入社員には最初に教えておく。

仕事を選ぶのは君だけど、その仕事を買うのは君じゃない。他の誰かだ。だから仕事とは、誰かの役に立って、お金と言う「感謝の形」をもらう事だと僕は定義する。人に感謝してもらうためには相手が何を求めているのかを知らなければならぬ。そのためには幅広い勉強が必要だ。それは学校の勉強だけではとても足りない。偏差値の高いエリートと呼ばれる人が、入社してみると全然使えなかったと言う話を聞く。受験のための勉強を、「自分の」偏差値をあげるための勉強としかみなせない人は、せっかく勉強した事も全て得点のためのもの、自分のためのものになっているから、他人を知ろうとか、他の人はどう考えるのかなという発送にはならない。「どうだ俺は偏差値が70もあるんだぞ！俺の商品を買え」なんて言われどもね（泣）。

同じ受験勉強でも、「へえ、知らなかった。こんな世界があるんだ」とか「この人達は一体どういう生活をしているのかな。もうちょっと調べてみようかな」と思って学んできた人

は、会社でもその発想で「お客さんは今どういう商品を求めているのかな？」「ウチの商品は他社の商品よりもどこが評価されているのかな？どこが負けているのかな？」と考えて仕事が出来ると。自分の利益だけを目指している人は誰も応援してくれないから、結局は儲からな
いってことだね。仕事にもつながる勉強が今も目の前にある。大事なものはそれを「広く世界
を知るため、他人を知るため」にやっているのか「自分の得点、評価をあげるため」にやっ
ているかという事だ。ぜひ君には前者の勉強をしてもらいたい！

仕事とは自分以外の誰かの役に立って利益を得ることだ。

他人に関心のないヤツは勉強もできないし、働く事もできな

い。まずは他人を知る事から始めよう！

6. サバイバル社会から分業社会へ

学ぶことも働くということも、他人を知る事ナシには始まらない。僕らが生きるこの社会と言うやつは、たった一人の「自分」と、68億人（2010年度の統計）もの「他人」が集まってつくっている。一口に社会といっても分かるようで分からない。ここで「なんとなく分かる」って知ったかぶりをするのはなく、納得するまで勉強してみよう。

社会の中で人はどのように関わり合い、どのように暮らしているのか？まずはそんな人と人との関わり方から勉強していこう。

遙か昔、人間がまだ猿に近かった頃、人々は動物と同じように自分の獲物は自分で調達し、洞窟を見つけては住み着いた。男も女も「自分の事は自分で」が基本で、それが出来ないものは群れからもはじき出され死んでいった（泣）

やがて原始人たちは共同で生活を始め、自分の能力に合った仕事を出し合うようになる。その頃の仕事は、男はマンモスなどの動物を狩ってくることに、女は木の実を集めてくる事だった。でも集団の中に男手が少なければ女の人も狩りをしただろうし、女手が少なければ男

だって服を作ったり木の実を集めたりしたはずだ。服も家も自給自足、全ての仕事を自分達で行っていた。家が作れなければ安心して寝る事はできないし、狩りが出来なければ飢えて死んでしまう。服が作れなかったら寒くて死んでしまう。文字通りサバイバルな社会だった。

この社会では頼れるものは「自分の力」だけ。力の無い者からバタバタと死んでいく。今僕らがこの時代にタイムスリップしたら誰一人として生き残れないだろうね（笑）

原始人は色んな仕事を一人でしなければならぬから、かなり大きな負担がかかった。あれもこれもやらなければならぬから、一つ一つの仕事の精度も高くはなかった。力持ちで狩りが得意な人でも、服を作ることは苦手だったり、手先が器用な人でも魚釣りは苦手だったり。そんな中で人々は得意なものを出し合って「協力する」事を覚えていったんだ。俺は力自慢だからマンモスを捕ってくる、私は手先が器用だから服を作るわ、一人よりも大勢の方が色んな能力を生かせるね。こうして個人プレーが主体だった類人猿は徐々にチームプレーが得意な人類になっていった。

やがて石器や鉄器などの道具が発達し、人々は色々な獲物を捕れるようになった。海に近い村人は魚を釣り、山に暮らす人々はイノシシや鹿を狩った。どんぐりを拾ってパンを作ったりする者も現れた。そして人々はそれぞれ手に入れた獲物を交換する事を始めた。いつも

同じものばかり食べていたら飽きちゃうもんね（笑）これが物々交換と呼ばれる「分業」の始まりだ。

その後、段々人口が増え、農業が始まり、人々の仕事も多様化してくる。食べられるものを狩猟採集するだけが仕事ではなく、武器を作る鍛冶屋、農作物を育てる農民、その商品を生入れたり売ったりする商人など、色々な仕事が生まれる事によって、全部を自分でやるのではなく自分はどれか一つの専門家になってそれ以外の仕事を誰かに任せるようになる。自分には好きなものだけを洗練し、苦手な事はそれが得意な人に代わりにやってもらおう。これが「分業社会」ってやつだ。

分業社会が発達した現代社会には無数の仕事がある。君も小学校で習ったよね。

- ・ 自然の産物（農林水産物）を生産するのが第1次産業
 - ・ それを加工して製品化する工業、鉱業が第2次産業
 - ・ 第1次第2次産業で作った製品を売ったり、サービスを提供するのが第3次産業
- こんな風におおまかに分けていたね。でも実際の仕事はその中でもさらに「何を作るか」「何を売るか」によって仕事の内容が全然違ってくる。

野菜を売る、と言う仕事を一つ例にしてみよう。野菜を売るためには農家が野菜を栽培す

るのはもちろんだけど、薬品メーカーが農薬を作り、機械メーカーが農業機器を製造して農家をサポートしているよ。また、野菜を販売する時には、自動車メーカーの作ったトラックに商品を載せて市場へ運び（その車は貿易商社が輸入した石油、さらにそれをガソリンに精製する石油工場のおかげで動いている）、市場の職員さん達の競りによって八百屋さんに売られ、八百屋さんがお客さんに売って初めて野菜は売れる。一つの仕事のために、いくつもの職業が関わっているんだ。それぞれの専門家が一つの目的のために協力して役割を分担する事で世の中は回っている。一人で専門家達の仕事全部をするのは・・・できないとは言わないけど、かなり難しいよね。

だから人は分業化の道を選んだ。それぞれの役割分担に「仕事」という名前を付けて、役割を分けた。

僕は野菜を作るから、君は料理をしてくれ。

ワタシは服をデザインするから、アナタは家を作ってね。

こんな感じでみんなが協力して生きていく道を選んだ。

分業社会では苦手なものはやらなくて良くなるから、みんな自分の仕事に集中できる。自給自足の時よりも、自分の役割だけに多くの時間をかけることができるから、一つ一つの仕

事は洗練され、質も向上した。みんながますます勉強してその腕を磨き、人よりも優れた者だけがその仕事を担う事が出来た。逆に中途半端に勉強した人はどんどん蹴落とされていった。そうやってできたのが今の社会だ。

君がこの社会で生きていくためには勉強が必要だと最初に言った。それは広い社会を知らなければ、世の中にどんな役割があるのかが分からないからだ。数ある役割の中でどれを選び、どれを究めていくのは君自身が決める事だ。親や先生はこの仕事をしなさいとは絶対に言わない。(言っただけはいいけないと思う。)ただ、君に色んな道を示すだけだ。君はいつか数ある道の中で君が生涯を通して、つまり死ぬまで「自分はこの道で生きていきたい！」と思える仕事を見つかるんだ。それは途中で変わっても構わない。もっとやりたい事ができたらそれをやるのもいいだろう。でもいずれにせよ何らかの道を歩みながら、究めながら、君は生きていく。だからその道を知るという意味でも勉強は、働く事、すなわち生きる事とは切っても切り離せない関係にある。

仕事は職業だけじゃない。家族を築けば子どもの世話をする仕事が増えるし、家族を養うという仕事が増える。地域で暮らせばゴミの当番があるし、地域のリーダーを決める会議や選挙がある。そういった勤めもみんなで分担しながら暮らしていくんだ。夫婦で、家族で、

地域で、国で、世界で、みんながそれぞれの役割を担うからこそ世の中は回っているんだ。

だからそんな分業社会では、それぞれの担い手である「人」がとても大事になってくる。自給自足で生きていた頃は、人というのはライバルでしかなかった。犬やサルを見れば分かるように、彼らは「縄張り」をはつきり区切って、自分が生活する圏内には他のライバルは絶対に入れないようにしているだろ。なぜか？獲物を奪われるからだ。犬やサルにとつて同じ種族の動物は自分が生きていく障害にはなるが、決して利益にはならない。他の犬やサルと仲良くしても何もない事がないのだ（笑）だからそれぞれが孤立して生活を営む。隣町の犬が死のうが知ったこっちゃない。「自分達とは関係ない」と言つて、自分達の生きることだけを考えていけばよい。そんな社会だ。（どこか最近の人間の社会と似ている部分も・・・）でも分業社会では君という一人の人間に大きな価値を見出す。君が将来担う役割は他の人には決して出来ないものだ。出来ないからこそ君に任せている。だから君がその役割を果たさなければ誰かが困ってしまう。困るところか最悪死んでしまう事だってある。もし君が将来医者になったら、もし君が将来先生になったら、もし君が将来大工になったら、もし君が将来・・・君という人間の将来は君だけのものではなく、社会は君の将来にめちやくちや期待しているんだ。逆に君も他の誰かに期待するら、自分の仕事だけを追究していける。み

んなそれぞれが責任重大だね。この社会では「自分」というかけがえのない存在をものすごく尊重するし、同じように「他人」という存在も尊重するんだ。お互いの仕事を認め合って、ベストを尽くし合う事で命をつないでいるからね。

よく思春期の若者が

「うるせえな！お前には関係ねえだろ。俺がどうしようと勝手だろ！」

と、まるで一人で生きてきたかのような事を言う。でもそれは違うよ。人間は生まれたその瞬間から絶対に「他人」の手がかかっている。一人でなんて生きてはいけない。

お父さんとお母さんがいなければ君は発生しなかった。お医者さんや助産士さんがいなければ君は無事に生まれてはこなかった。君が小さい頃、何度も読んだ絵本や、壊れるまで遊んだおもちゃ、ぼろぼろになってお母さんに穴を繕ってもらったぬいぐるみ、みんな「誰か」の仕事の結果だ。そんな多くの人々、彼らの仕事によって君は今まで生きてきた。全然一人の力じゃない。

世話をしてくれた家族の力はもちろん、食べ物や身の回りのものを作ってくれた人がいる。社会のみんなが、それぞれ仕事を役割分担する事でみんな生きている。君のお父さんやお母さんもそれぞれ家の中の「親」という務めの他に、社会の中で役割を持って勤めをしながら

ら君を育ててきた。みんなが君という大事な存在のために仕事をしてきた。

人は助け合うもので、人は尊重するものだ。これが人間の社会の基本的なルールだ。だから子どもの頃から友達と仲良くすることを習う。大事な勉強だね。そして小学校や中学校でも「道徳」と言う授業の中で、助け合いや思いやりの心を学ぶ。今の社会では軽く見られがちだけど、ものすごく大事な勉強だ。このルールがなければ今の世の中は成り立たない。でも多くの人はその大切さに気付いていない。だから道徳と言う教科は入試に出ないし、軽視されている。でもそれじゃあ大事なものを見失ってしまうよ。思いやりや他人の仕事への感謝を無くした社会では、人を「お金」や「点数」で判断し、自分は「誰かの仕事」によって生きている事を忘れ、「自分さえよければ」と自分のためだけに働く社会になってしまう。そんな社会はきつと破綻するだろう。そうならないためにもまずは社会の仕組みを知り、どうして働くのか、どうして協力しないといけないのかを理解する勉強が必要だと僕は思うんだ。だから僕は国語にも数学にも理科にも社会にも英語にも、みんなが受験勉強のために必死に勉強している教科に「道徳」の要素を取り入れて授業を行うようにしている。

今まで説明してきたように世の中は分業という仕組みで回っている。その仕組みを知り、どうして協力や思いやりの心が必要かがわかった時、色んなものが見えてくるよ。

君の周りには色々な物がある。それを作った人達は、自分の仕事によって君が喜ぶ事をきつと願っているはずだ。誰もが自分の仕事に自信と誇りを持ち、その仕事を受け取ったお客さんが喜ぶ姿を思い浮かべて働いている。そんな情熱と熱意がなければ君が気に入るはずはない。ゲーム、漫画、プラモデルにお人形、テレビも車も飛行機も、君が「これすごいなあ、ほしいなあ」と思うものを作った人はメチャクチャ熱い人なんだ！

君もいつかそんな風に熱く働いていくんだけど、まだ働いていない君は今何をしたらいいか？僕が一つ教えてあげよう。君はまず、誰かの仕事に「ちゃんと感謝」しよう。それを「当然だ」と思うのをやめよう。一つ一つのものにはそれを作った「人間の手」が宿っている。遠く離れたどこかの国の見知らぬ人の手がその商品を作った。せめてその事実をちゃんと受け止めよう。そしてその仕事は自分には出来ないと思つたら、素直に感謝しよう。自分で出来ないのなら、その人がいなければ君は生きていけないのだから。それが正しく世界を知るといふ勉強だ。

そして君もいつか社会に出て仕事をする時は、同じように誰かを喜ばせて欲しい。

誰かが君の作った商品を手に取った時、

「うわあすげえ！これマジ最高！」

と感謝してお金を払うようなものをどんどん造ろう！

または誰かが君のサービスを受けた後で

「あなたがやってくれたおかげで本当に助かった。ありがとう！」
と感激するような仕事をしていこう！

そのためには嫌々やっている仕事では絶対無理だ。やらされてやっている勉強でも絶対無理だ。人を喜ばせる仕事をするためには日々学習し、好きな道を見つけ、自分から進んで学んでいく必要があるんだ。僕だってそうだ。僕は勉強が好きで、君達にちゃんと勉強する意味や勉強の面白さを教えたいから、こうして先生として仕事をしている。君達がそれぞれの道を見つけやすくなるように、もつともつと世の中の事が知りたくなるように、僕も頑張るから、ぜひ君も勉強を続けていこう。勉強を楽しんでいこうぜ！

分業社会はみんながそれぞれの仕事を出し合って生きてい

く社会だ。たくさん勉強して好きな仕事を見つけよう！

そして君の好きな道を、君の役割にしよう！

7. お金を稼ぐということ

「世の中お金が全て。」「地獄の沙汰も金次第」なんて言葉があるように、世の中とお金は切っても切り離せない関係がある。仕事をする一つの目的には「お金を稼ぐ」と言う事も含まれている。でもお金って一体何だろう？その本当の意味を君は知っているだろうか？生徒に「何が欲しい？」と聞く。

「お金。」と返ってくる。

「将来何になりたい？」と聞く。

「お金持ち。」と返ってくる。

「じゃあいくら欲しいの？」と聞くと、

「わかんない。でもたくさん。」と言う答えが返ってくる。

あまりに今の社会はお金を中心にした考え方が当たり前になっていて、子供達はお金さえあれば幸せだと思うようになってしまっている。お金が儲かる職業だから医師や弁護士になりたいと言う生徒が大勢いる。それは学力的に無理だからという子は、お給料が安定するからと言う理由で「公務員」を将来の夢にしている。公務員って何する仕事かもしれない（泣）

でもそんな子に僕は言いたい。君は「生活が安定するため」に先生をやっている人に教わりたいか？ 残業して生徒の質問に答えるよりは早く帰ってビールを飲みたいと言う先生がいいるか？ 僕は絶対嫌だ。僕は今まで、生徒に情熱をかける先生達にたくさん出会ってきたから、自分もそんな風になりたくて先生という道を歩んだ。だから今も、僕の生徒が「中村先生と出会えてよかった」と思うような先生になろうと思ってる仕事をしている。最低限のお金は必要だけれど、お金のためだけに働く事はとても悲しい事だと思う。

どうしてこれほどまでにお金が中心の世の中になってしまったのだろうか？ そもそもお金って一体ナニモノだ？

まずはお金が生まれた理由を説明しよう。

もともと人々は自給自足をしていた話はしたよね。それから徐々に役割を分担する分業化を進めていった。その頃は仕事もそんなに多くはなかったから肉と野菜、武器と農具というように仕事と仕事を交換していた。物々交換だ。

でも社会が発達し、色んな仕事ができいくと物々交換はできなくなる。

例えば猟師さんがイノシシを持ってコンビニに行き、

「これとおにぎりを交換してくれい」

なんて言っても、店員さんがイノシシを欲しいとは限らないよね。(生肉をもらっても・・・)その仕事、つまりイノシシを一番必要としている人に交換をお願いすればいいんだけど、これだけ人が多くちや、一体誰がそれを欲しがっているのか分からない。仮に相手がイノシシを欲しがっていたとしても、その人の仕事を猟師さんが欲しがっているかどうかは分からない。ぴったり物々交換できる可能性はかなり少ないね。



そこで人々は「お金」という道具を作った。仕事と仕事を交換するのではなく、仕事をお金と交換する事によって、必要な時に必要な仕事を手に入れられるシステムを作ったんだ。

誰かの仕事が必要なときは「お金」を払って交換する。だから猟師さんは、自分の仕事と交換してくれる人を捜し求めてイノシシを持って歩き回らなくても、絶対にそれを必要としている所、「肉屋さん」に売ってお金に交換してもらえばいいんだ。そしてそのお金をもって、自分が欲しい物を買えばいい。自分が必要とする仕事はお金を払って誰かにしてもらえばいいんだ。そうすれば相手と自分がぴったり一致して物々交換しなくても、一方通行で仕事を売ったり買ったりする事ができるだろ。

こうしてお金による交換が始まったが、そうなるとお金は仕事の度合いを示すバロメータ（秤）になっていく。精度の高い商品、専門的な商品は中々誰でも真似できない仕事によって造られるから当然金額も高い。逆に誰にでもできる仕事は金額も安くなる。仕事は一度「お金」という基準で量られるようになり、金銭的価値の高いものを人々は「価値あるもの」と判断した。逆に金銭的価値のないものには目もくれず、無意味なもの、不要なものとして切り捨てていった。たとえそれがどんなに大切なものだったとしても。

今や世の中のありとあらゆるものがお金によって量られるようになった。時給〇〇円とい

う風に、仕事も商品と同じように買われていく。人は自分の仕事を売って、そのお金で他人の仕事を買う。今、世の中はこのような仕組みで回っている。

この社会では、「みんなが欲しがらる仕事」をする人はお金をたくさん手に入れることができる。例えば空を飛べる「羽」を誰かが作ったら、君はきっと欲しくなるだろう？それはきっと世界中でバカ売れするよね（笑）。そして開発者は大儲けをするだろう。使いきれないほどの大金を手に入れるはずだ。

また、癌やエイズの特効薬が出来たら、その病気で苦しむ人は絶対に欲しがらるはずだ。だからその薬は飛ぶように売れる。そしてその開発者はやっぱ大金持ちになる。そのお金を使って何万人分の仕事を買うことができる。別荘をいくつも所有して、高級車を乗り回し、一生遊んで暮らせるんだ。いいか悪いかは別として、これが世の中のルールだということは知っておこう。

お金を稼ぐ事は決して悪い事ではない。お金を稼げなければ生きていけないんだから、むしろ堂々とお金を稼げる仕事をしていこう！でも、最初に例で出したように、お金が目的になって、お金さえあればいいという考えになる事に対しては強く警告を与えたい。そうなる、人は仕事への感謝を忘れ、お金さえ払えば何でも済むという人間になってしまう。もつ

とたちが悪いのは、お金を稼いでいない、お小遣いをもらっているだけの子ども達が、人の仕事をナメてしまうことだ。親からもらったお金で子ども達が色んな商品を手にし、それを作った人の事なんか頭にもなくなつて、それに飽きたら次から次へと「使い捨て」をする。自分にはそのお金を稼ぐ能力がなくても、親がお金をくれるから、自分の能力以上の「仕事」を買えてしまう。いつか自分で働き始めるとき、一気にそれが下がるんだ。今まで親の力で買っていた物が買えなくなる。親といたほうが楽だと思いはじめの子も出てくる。そうなるはずと親元を離れず、親に養ってもらいながら生きていく。自分は家庭を持ち、親になる事もなく、親が死ぬまで親の元に寄生する。そんな人々の事を「パラサイト・シングル」と言う。それでいいのだろうか？

最近の子ども達はメチャクチャ金持ちだ。一台何万もするゲーム機、ソフトを持ち、パソコンを持ち、電子辞書を持ち、携帯を持ち……。世界の国々と比べると遥かに高い経済水準で生きている。別に僕はそれ自体は否定しない。今、色んなものに囲まれて裕福な生活を送っている子は、いつか自分が働く時にその水準をキープできなくなるとメチャクチャ辛いはずだ。今まで普通に買った物が自分のお給料では買えない(泣) そうなるのは嫌だから、その子はきつとたくさん勉強して同じくらいのお金を稼げるようにするはずだ。それならい

い。でも、どうせ自分で働いても大していい暮らしはできないから、親に援助してもらおうなんて考え始めるなら、最初から贅沢なんかしないほうがいい。

ブラジルの子ども達はメチャクチャサッカーがうまい。ブラジルは何度もワールドカップで優勝している強豪国だ。なんでブラジルではサッカーが盛んなのか？

ブラジルの子ども達はかつてはスパイクやユニフォームも買えないほど貧しかった。そんな子供達の夢は「サッカー選手になること」だった。プロのサッカー選手になれば大金をもらえる、大好きなサッカーで一生暮らしていけるお金を稼げるなんて幸せだ。もちろんほんの一握りしかその夢をかなえる事は出来ないけれど、それでもブラジルの子供達は自分の力で生きていこうとしていた。今はブラジルもBRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国という経済の発達が著しい国々）と呼ばれるほど経済が発達し、少年達はストリートではなくクラブチームに入ってサッカーをしている。裕福になってスパイクやユニフォームも買ってもらえるようになった。けれど彼らの夢は変わっていない。いつかプロのサッカー選手になって、自分の力で生きていくこと。小さい頃から自立の芽が育っている彼らと、大人になっても親のお金を当てにしている子供と、一体君はどっちになりたいか？

僕は仕事というのは「自分以外の誰かの役に立って利益を得る」事だと教えた。だからお金は「誰かが喜んだ、感謝の度合い」だと言ったね。君がどれだけたくさんの人から感謝を得たか、それを量るバロメーターとしてお金をたくさん稼いで欲しい。そしてそのお金を何のために使うのか、それを真剣に考えて欲しいんだ。

「いくらでもお金が欲しい」というアホな子ども達に教えてあげたいから、僕は「欲しいもの」が一体いくらで買えるのか調べてみた(笑)。

・車・・・数万円の中古車から500万円以上する高級車、5000万から1億円もする特殊高級車がある。

・家・・・安いアパートで月2、3万円から。都心に行くとも月7万から10万を越える物件もある。また購入する場合、数百万円の家から数億円の家まである。でも、高くても5億円くらいだろうか。

・ゲーム機・・・僕が使っていたファミコンは1万5千円、スーパーファミコンは2万5千円だった。プレイステーションは約4万円、PS3は8万円から10万円もした。ニンテンドーDS、PSPは2万円程度で販売された。(その後どの機種も値下げが行われている)

・旅行・・・国内旅行で5万円程度、海外旅行ではアジアで10万円程度、ヨーロッパで2

0万円程度、アメリカで25万円程度。世界一周旅行をすると安くても100万円位、豪華客船でいくと2000万円位かかるらしい。宇宙旅行でも2000万円程で行ける。

・食事・・・10円で食べられるお菓子から数十万円の高級料理まで。

・洋服・・・一着999円の服を僕は着ているし、オークションや古着屋などでは50円くらいで買える服もある。また一着数十万円から数百万円もするブランドの服もある。

・学校・・・日本の都心に学校を建てれば数十から数百億円かかる。一方ネパール郊外に30万円ですchoolを建てた人もいる。

・宝石・・・世界一高いブルーサファイアのロックフェラー・サファイア(66カラット)が3億5700万円、世界一高い真珠はカルティエの真珠ネックレスで約4億円(推定)、世界一高いダイヤモンドは45カラットもあるホープダイヤモンドで約80億円(推定)。

お金で買える物は必ず誰かの「仕事」の成果だから、交換が可能になる。どんなに高い物でも君がそれと同じだけ人を喜ばせれば交換が可能になる。でも、この世にあるものは全てお金で買える、なんてことは絶対にならない。友情や愛情など、人の気持ちに関するものはもちろん、歴史的、文化的に価値のあるものは人類共通の遺産として誰かの所有物にせず、みんな

なで守つていこうとしている。代々受け継がれてきた伝統や文化には何人もの人の想いがこもっているから、たった一人の人間の仕事と交換出来るはずはないんだ。

「お金」はあくまでも手段の一つであつて、決して目的じゃない。つまりお金を集めるために働くのではなく、欲しいもの、必要なものと交換するために仕事をするんだ。まさに仕事の交換だ。そのためには君自身がまずは人からの感謝を集めなくてはいけない。お金で自動的にもらえるものなんかじゃなくて、自分で集めていくものなんだ。

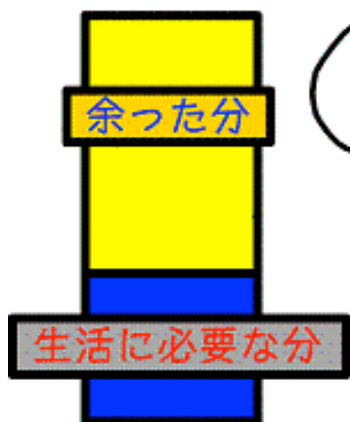
また、どれだけお金をたくさん持つていても、その使い方が決まっていなければ全然意味がない。人間が生きていくのには「お金」がいる。食べ物を買つて、住む場所を見つけて、服を着て、必要な物は手に入れなければならない。

でも、必要なものを買つて残つたお金は「余分な」お金になる。もちろんそれを取つておいていざという時に備えておいてもいい。高級車を買つたり、大豪邸に住んだり、宝石を買つたり、自分が仕事を頑張つたごほうびとしてお金を使うのもいい。

僕はお金を使う事について何も批判するつもりはない。それだけの仕事を自分が出したのだから、欲しいものを自由に買つてもいいと思う。欲しいものを買える位、自分も人を喜ばせていこうという想いは尊重する。



余った分を
本を買おうと



たくさん余ったから
ぜいたくしようかな..



ただ、自分の仕事を「他の人のために使う」こともできるって事を、君には覚えておいてもらいたいんだ。自分のみを削ってまで他人に使う人もいる。とてもすごい事だけどそれを真似しなさいとは中々言えないから、せめて余った分を誰かの役に立てる使い方をしてみようか。

例えば君の仕事は誰もが欲しがるとする。でも、他の人達は君と同じように一億円の仕事はできない。君の作った薬は1兆円を稼げる薬だったとする。でも世界中でその病気に苦しんでいる人はとてもじゃないけどそんな大金は払えない。自分自身の食べ物を作るだけで精一杯だから。そんな時、君はどうする？

別に1億円の仕事だから、一億円で売らなきゃいけないって決まりはない。坂本龍馬が薩長同盟や大政奉還を画策した仕事は、感謝の度合いで言えば相当な額だ。でも龍馬はそれをもたらしたか？

野口英世は梅毒と言う病気の原因を特定し、その後も黄熱病という病気を研究して自らも黄熱病に感染し、アフリカで亡くなった。野口英世のおかげで命を救われた人が大勢いる。その感謝の度合いは相当な額に上る。でも、それは決してお金で片付く問題ではなかった。何度も言うが、お金は人々の「仕事の交換」だ。自分は一つの仕事を専門的にやるから、代

わりに他の仕事は他の人に任せよう。そうやって助け合って生きていこうというのが人間の社会だ。だからお金があるからといって全部を自分のために使うなんて考えないでいいんだ。本当は1億円の仕事だけど、困っている人がいるなら無料でやりますよ。僕は十分生活できているから。

本当は1兆円の薬なんです。でも、救える命があるなら無料であげますよ。僕は十分生活できていますから。

自分の仕事の価値をお金と交換するのではなく、夢と交換する。そんな使い方をしている人だつてたくさんいる。そっちの方がかっこよくないか？

野口英世の後にも大勢の人がアフリカで医療活動に従事している。お金がたくさん手に入る日本ではなく、わざわざ遠く離れたアフリカの地で彼らは命を助けている。なぜか・・・？
彼らは言う。

「命の危機にある人が大勢いるから」と。

2008年の8月、アフガニスタンの国境近くのパキスタンで、ある一人の日本人が誘拐され殺害された。彼の名は伊藤和也さん。伊藤さんは日本で生まれ、高校・短大で農業を学

び、それを戦争にあえぐ世界の人達のために使おうと。パキスタンに渡った。伊藤さんはその志望理由書でその想いをこう語っている。

「私の現在の力量を判断すると、語学は、はっきりいってダメです。農業の分野に関しても、経験・知識ともに不足していることは否定できません。ただ私は、現地の人たちと一緒に成長していきたいと考えています。

私が目指していること、アフガニスタンを本来あるべき緑豊かな国に、戻すことをお手伝いしたいということです。これは2年や3年で出来ることではありません。子どもたちが将来、食料のことで困ることのない環境に少しでも近づけることができるよう、力になればと考えています。

甘い考えかもしれないし、行ったとしても現地の厳しい環境に耐えられるのかどうかもわかりません。しかし、現地に行かなければ、何も始まらない。そう考えて、今回、日本人ワーカーを希望しました。」(原文より抜粋)

現地の人々と共に井戸を掘り、農業を教え、貧困に苦しむ顔を変えようと伊藤さん

は活動してきた。そんな伊藤さんを村の人達も次第に受け入れ、共に大地を耕し、共に収穫を喜んだ。日本で学んだ事が世界ではこんなに役に立つんだ。その実感と喜びを伊藤さん自身も感じていたのだろう。しかし2008年の夏、西洋文明の流入を許さない一部の武装勢力の手によって伊藤さんの夢は途絶えた。

伊藤さんのように海外でボランティアの仕事に従事する日本人は大勢いる。みんな日本という教育に恵まれた国で学んだ事を、「世界中の大勢の人のために使いたい」と思って行動しているんだ。中には伊藤さんのように凶弾に倒れた方もいる。でも、彼らの命は、その功績は決して無駄なんかじゃない。

伊藤さんの残した仕事は確かな「技術」となって現地の人々の毎日の「食」に確かに刻まれた。僕はこの話を高校生に授業をした時に知った。高校の教科書に使われていたんだ。授業の後、伊藤さんの活動を知った僕は思った。

僕も何か世界の人のためにできる事はないだろうか。

自分が今までやってきた事で、何か活かせる事はないだろうか。

一人の日本人の行動が次の「芽」を育て始めたんだ。そして僕はこうやって、もつと多くの人にその想いを伝えようと文章を書いている。それを読んでくれた君の心にも小さな「芽」

が生まれるように。

そんな風に自分の仕事で誰かを喜ばせようという人達がいる中で、世の中を何でもお金に換算し、人の命や生き方までもお金で解決できると思ってしまう人達が大勢いる。偏差値の高い学校へ行けば、いい会社に入って幸せな人生を送れる、そう考えている人がたくさんいるだろう。

彼らは人を「物差し」で量ってしまう。「偏差値の低いヤツは頭の悪いヤツ」と子どもの頃テストの点数でしか人を見ることができなかった人間は、大人になると年収や役職でしか人を判断できなくなる。そして年収を基準にして結婚相手を選び、何をやったかではなく、何になったかに重点を置いていく。さらに自分の子どもにも同様に接し、頑張った事をほめるのではなく、テストの結果だけに一喜一憂する。そして子どもも将来の高給取りを目標にして「お受験マシーン」にしながらいく。将来の可能性に満ちた子どもが、やりたい事よりも儲かる事を重視している、そんな時代になりつつある。

でもお金にだけ目を向けた人生は決して幸せにはならないと思うんだ。お金で結ばれた関係はお金が尽きれば無くなってしまふ。「金の切れ目が縁の切れ目」とはよく言ったものだ。

子どもにお金をあげすぎて、子どもが親の援助なしでは生きていけない人間になってしまったり、お金をたくさん持つっている頃は大勢の人に囲まれていた人が、お金を失った瞬間に孤独になってしまったり、自分が死の淵にある時ですら家族は遺産の取り合いでバラバラになっていた。お金を目的にしまった代償は大きい。それでいいのか？

君がもしもそんな考え方になってしまったら、もう一度お金の本当の意味を思い出して欲しい。本来の分業社会という仕組みを考え直して欲しい。

自分の得意な仕事を担い、苦手な仕事は相手に任せる。自分ができない事をしてくれるんだから相手に感謝し、お互いを尊重しながら付き合える。「いただきます」「ご馳走様」「ありがとう」、お互いの仕事に感謝をしながら共に同じ時代を生きていく。それが本来の仕事と言うものだったよね。たとえそれが100円であろうと1万円であろうと必死に仕事をしている人に感謝の気持ちを抱けない人間は幸せにはなれないだろう。金銭的には充足しても、心は満たされない。お金ばかりが人生じゃない。僕が言いたいのは、お金はあくまでも「感謝のバロメーター」だつて事だ。自分の考えがお金に汚染されておかしくなりそうなときはこの「教育論」をもう一度読もう（笑）たくさんのカッコイイ先人達の声を聞こう！そして信念を持って働いていこう。

誰かを喜ばせてお金をたくさん稼ごう！そのお金を使って君も喜ぼう！

お金は仕事と仕事をつなぐ「感謝のバロメーター」だ。

「感謝」の無いお金は人を狂わせ、人生を狂わせてしまうから御用心！

8. 仕事の使い方、お金の使い方

世界的に有名なアメリカのプロゴルファー、タイガーウッズはナイキの帽子をかぶる事で、

スポンサー契約料を1日あたり5,500ドル(日本円で638万円)得ている。その反面、その帽子を作るナイキのタイ工場で働く工場労働者の賃金は1日あたり4ドル(日本円で64円)。その工場の従業員はタイガーウッズが1日でもらう分の仕事をしようと思つたら、38年間、毎日休みなく働かなければならない。

この話から、タイガーウッズの仕事はそれだけすごいと言ふことがわかる。でもだからといって、その工場で働く人達には価値がないのか?と言われても、そうだとは言えない。スポーツ選手や芸能人、大会社の社に政治家、医者、弁護士・・・、お金持ちになれる仕事はたくさんある。彼らは大勢の人に強い影響力を与え、彼らにしかできない仕事をする。その対価として大金を手にするからそれをどう使おうと外野が口を出すことじゃない。でも逆の側面、あまりにもお金がない人々については考えていかなければいけない。

お金によって全てが換算されてしまう世の中を僕は批判したが、今や世界中が資本主義と言ふお金に換算するシステムに基づいて動いているため、世界全体で貧困が大きな問題となっている。それは決して他人事ではなく、僕ら一人一人の「これから」に降りかかってくる問題だ。

「南北問題」という言葉を聞いた事があるだろうか?先進国と呼ばれる経済的に恵まれた国

はほとんどが北半球にあり、発展途上国と呼ばれる貧困に喘ぐ国は南半球に多い事から付けられた名称だ。北半球と南半球の国の間には経済的格差が広がり、貧困が引き起こす様々な問題がますます深刻になっている。路上で生活するストリートチルドレン、世界に約25万人もいると言われる少年兵、これらの多くは南半球の国に多く広がる問題だ。

貧しい国ではお金を得るために人身売買が横行し、中には臓器売買まで行っている人もいる。違法と知りつつも腎臓を約12万円で売っている人を君はどう思うか？悪いヤツだと思ってもいい。僕も最初はそう思った。でも、その理由を聞くとよくわからなくなってしまう。臓器を売る一番の理由は「飢えて死ぬくらいなら、臓器を売ってでも生き延びた方がまだだから」というものだったんだ。それでも「それはいけない事だ！」と言いたい。でも、「じゃあどうやって生きていけばいいのか」と言われれば、それに答えられない自分がいる。

戦争、紛争、飢餓、環境、病気、麻薬など、世界で問題になっている事の多くはこのように根本的な大問題があるんだ。その一つが「お金の有る無し」という問題だ。

分業化が進んだ現代社会で人々は仕事を分け合って生きている。人々はそれぞれの得意な分野や、好きな分野を、学び、そして磨いている。自分は好きな事を極めて、苦手な分野は

他の誰かに任せておけばいいという、一見合理的で理想的な社会だ。

でも、世界は平等じゃない。もしも勉強する事を許されなかったら？勉強しようと思っても学校が無かったら？生まれた国は戦争をしていて武器を持って戦わなければいけなかったら？本を買うどころか今日のパンさえも買えなかったら？

勉強ができれば質の高い仕事は出来ない。だから手に入るお金も少なくなる。逆に恵まれた教育環境にある国の人々は高い学力を持ち、高度な仕事を行うから、たくさんのお金を手にすることができる。そして貧しい国の人々の仕事を安く買い取る。そしてまた同じ事が繰り返される・・・。

今、世の中では質の高い仕事を先進国が独占し、発展途上国の国々は勉強もままならない環境の中で、安い賃金で必死に生きている。だったら自分たちで自給自足すればいいじゃないかと思うんだけど、先進国が地球を汚してしまった影響で農業をやるうにも砂漠化が広がっていたり、植民地支配の影響で一つの作物しか育てられない畑になっていたりする。さらに先進国にとっても自分達のやりたくない仕事、面倒な事を発展途上国に押し付けているから、その国がいなくなると困る。そんなこんなで、その国の人々はなかなか技術や教育が発達しない。そんな現状があるんだ。

僕も君も実際それを目の当たりにしているよ。僕らが使う日常生活品の多くに「Made in China」や「Made in Vietnam」といった表記を見つけられるだろう？君が使う100円ショップの商品は、それよりも安い賃金で働いている労働者の手によって作られている。君が飲むコーヒーは、それを栽培しながら一度も飲んだ事がない労働者の手によって作られているんだ。そういった商品の多くを僕たちは安く、大量に仕入れる事ができる。僕たちが安く買えるということは、それを作った人の手にはわずかなお金しか残らないという事だ。僕達は大量に仕入れて、大量に捨てる。そんな大量消費社会という世界では、僕らが「無駄遣い」をしている裏側で、その一つの商品が手に入らずに飢えて死んでいる人々が大勢いる。僕らにとってはたくさんある安物の一つであっても、地球の裏側の人にとっては今日一日を生きられるかどうかを左右する貴重な品になる。

こういった現実を見ないで過ごせる程、世界は甘くない。いつか経済が熟成し、立場が逆転したら今度は僕らが貧困に喘ぐだろう。現実には日本経済は低迷を続け、日雇い労働者が増加し、若者はお金がない事を理由に結婚や出産を控えてしまっている。国の借金が1000兆円にも達するような国家が貧困国家にならないなんて誰も言えないだろう。「先進国」や「発展途上国」なんて枠組みはいつでも逆転しうるもの、明日は我が身だ。だったら同じ地球の

一員として一緒に問題を考えていくべきじゃないか。日本には「困ったときはお互いさま」という発想がある。いつの日か日本でも経済が困窮し、人々が財産をなくし、教育を受けられなくなってしまう日が来るかもしれない。そうなる前に次の世代を担う僕ら、君らが一生懸命勉強してその解決策を練らなければいけないんじゃないか。まずは困っている国を助けながら。

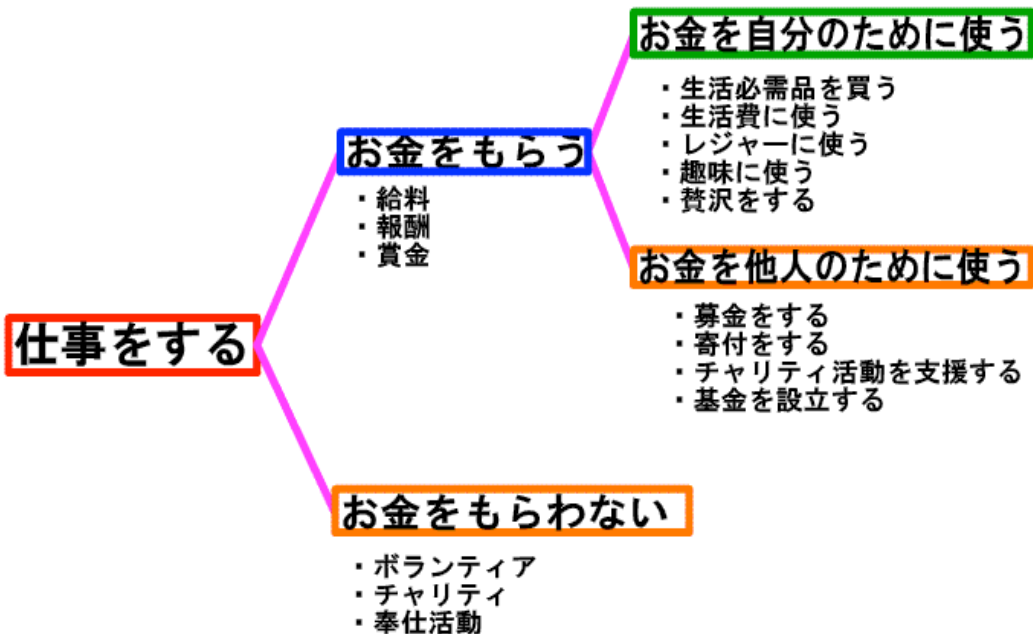
僕は世界中の格差や貧困を解決する一つの鍵は「お金の使い方」だと思う。

お金と言うのは誰かを喜ばせた仕事の結果だと言った。でも仕事を全てお金に換えると、人は財産としてお金を取っておきたくなる。そして自分のために使いたくなる。お金はどうやって使うことができるのか？ちよつと考えてみた。

まず、お金を稼ぐ大前提として、人は仕事をする。自分の好きな道を選びその道を学ぶ。そしてその過程で習得した技術を生かして誰かを喜ばせる。これが仕事だ。

仕事の結果として人はお給料をもらう。そしてそのお金を使って生活するための費用や、遊ぶための費用に充てるんだ。多くの場合はそうやって仕事を使っている。

でも実は仕事の使い方ってそれだけじゃないんだ。まず、「お金を受け取らない仕事」と



仕事って色々なことに
使えるんだね



自分のためにも
人のためにも
使い分けができるんだね



いうのがある。元々仕事は自分の仕事と相手の仕事を役割分担させて交換するというものだった。僕がこれをしてあげるから代わりに君はこれをしてくれ。必ずそこには交換条件が付いた。それが今の社会、つまりお金を払えば何でもするけど、お金が無ければ何もしないと
いう関係を作ってしまった。

確かに人はお金で動く。そんな一面もある。でも、人間ってのはそんな損得勘定「だけ」で動けるものではない。いつも君に料理を作ってくれるのはお母さんは君からの報酬を求めているか？君が好きな学校の先生はお金のために君に接しているか？

君だってそうだ。電車の中で立っているおばあさんに席をゆずった事はないか？僕はあるよ。その時おばあさんから代わりにお金をもらったかい？そんなはずはないよね。僕はそんなにいい人ではないから（笑）、滅多に人助けはしないけれど、それでも僕だって人助けをしたことはあるぞ。

20代の頃、夜な夜な女の子をナンパしにバイクで駅まで通っていた事があった。その日も仕事が終わわり、気合を入れて駅まで向かっていた。駅までの道をルンルン気分で行っていた。僕。たまたま交差点が赤になり、信号待ちをしていると一人のおじさんが話しかけてきた。

「〇〇病院にはどうやって行ったらいいですか？」

その病院は歩いて10分くらいの所にあつた。道も簡単だったので僕はおじさんに道を教えると、青信号と同時に走り出した。でも、走りながらおじさんの事が頭から離れない。どんな事情があるかわからないけど夜の12時に体中汗をかきながら病院を目指すおじさん。

僕はUターンしておじさんを追いかけた。さっきの場所からすぐ近くにおじさんはいた。

「おじさん、乗んなよ。連れてつてあげるよ。」

汗もかいているし、いいですよというおじさんに、僕はナンパした女の子にかぶせるためのヘルメットを渡し病院まで送った。病院でおじさんはずっとありがとうと繰り返し返していた。

別にいい事をしたかったわけじゃない。放っておけなかつただけなんだ。

そんな話はまだあるぞ。授業に行こうとバイクで走っていると、またまたおじさんが、自転車に乗りながら片手でもう一台の自転車を引っ張っている。この時もやっぱり僕は一度は通り過ぎた。でも、結局引き返して一台の自転車に乗っておじさんの家まで行ってあげた。

帰りはもちろん徒歩でバイクのところまで戻った（泣）授業にも30分遅れてしまった（ゴメン）

困っている人がいたら助けてあげたいと言う感情が僕らの中にはある。自分に出来る事なら何かしてあげたいと思ってしまう。そんなときは対価をもらわずに、相手の仕事との交換

を求めずに、こつちから一方的に仕事をしてもいいんじゃないか？

世の中にはそんな仕事の仕方をしている人がいる。ボランティアやチャリティ活動とよばれる仕事の仕方だ。芸能人やスポーツ選手がチャリティのために無償で歌を作ったり、スポーツ教室や大会を開いたりして、売り上げたお金を「自分のため」に使わず、「他人のため」に使っている。

ダイアナ元イギリス皇太子妃は生前、エイズや白血病などと闘う人々を支援したり、地雷をなくそうと呼びかけるために世界中を飛び回っていた。イギリス王族の人間が、かつて戦場だったボスニア・ヘルツェゴビナやアンゴラといった地雷原へ自分の足で視察に訪れ、被害を受けた人たちを励ますという姿には世界中の人びとが感動を覚えた。いくら最大限の配慮をしたとしても安全とはいえない地雷原を、ダイアナは防御マスクを付けて自ら歩いた。僕もそうだが、ダイアナの活動によって地雷の存在やその恐怖を知った人も多く、ダイアナ没後も地雷撲滅活動に参加する人は後を絶たない。



どんな身分や肩書きがあろうと、人を助けたいという気持ちを止めることはできない。

(マスクをつけ地雷原を歩くダイアナ妃)

一方で最近の中高生なんか「内申書のためにゴミ拾いをしました」「評価を上げるために老人ホーム行ってきました」と恩着せがましく「助けてあげました！」って言っているのも確か「ボランティア活動」という名前だった（笑）。本来ボランティアとは「自発的」という意味で、困ってる人を見つけた時、自分にできる事があって、それをしてあげたくて仕方がなくなつた時にするものなんだ。困っている人を無理矢理作って、自分にはまだ力も十分なのに、大してしたいとも思わずにする活動はボランティアではないよね。

また、募金や寄付など自分の仕事を一旦お金に交換した後でそれを誰かのために使う事もできる。大リーグで活躍する松井秀喜はベトナム戦争孤児の里親になったり、地震や津波などの災害が世界のどこかで起こつた時には義援金を何千万円も出資したりしているし、ソフトバンクの和田毅投手は2005年から自分の試合での打球数×10本のワクチンを世界中の子ども達に寄付していて、今までに10万本以上のワクチンを寄付している。（和田投手は僕と同じ大学で卒業式も一緒だった。面識はないけど同世代が頑張っている姿に僕も共感を覚える。）

自分が素直に誰かを助けたいと思つたら、その気持ちには正直でありたい。変に「ボランティア」という枠に捉われず、自分ができる事で誰かを喜ばせてあげれば、相手が喜ぶ姿を

見ることができる。それに何より「自分」という存在が誰かにいい影響を与えたというのは気持ちがいい。君という一人の人間が誰かの心に刻まれるんだ。

「あの時あの人にあんな事をしてもらった。だから私もそれを見習って困ってる人がいたら同じようにしてあげようと思っっています。」

そんな輪が広がっていけばいいと心から思う。

「情けは人のためならず」と言う言葉がある。誰かにかけて情けはやがて回りまわって社会全体を優しい輪で包む。そして自分にも優しくしてくれる人が大勢現れる。結局仕事というのは誰かを喜ばせる行為に他ならないんだから、それがお金に変わろうと変わるまいと、自分の学んできた事を他人のために思いっきり使っていく事に変わりはないんだ。

まずは思いっきり学ぼう。君自身に余裕がなければ、君自身が困っている人だったら(泣)、誰かを助ける事は出来ない。そして道を見つけて働き始めて余裕が生まれたら、その仕事を誰かのために使ってみてごらん。君の仕事が無償で行ってもいい。君がもらったお金を、君が共感できる団体に募金するのも良い。そうやって誰かの感謝を栄養にして君自身は大きくなっていくから。68億人の人を助けても、目の前のたった一人の人を助けてもいい。自分以外の誰かを助けたときに君という人間の必要性、君がこの世に生まれてきた意味が分かる

んじゃないかな。勉強、学び、そして人のために働く事。これがそろった時、君は君の人生を熱く生きることができる。

そうすれば、そんな輪が広がれば、きっと「貧しい」国はなくなるんじゃないかな。経済的に貧しい国も、「心が貧しい」国もね。

結局世の中は「人」なんだ。決してそれは「金」じゃない。

君が誰かを助け、誰かが君を助けるという、助け合いの社会を作ろう！

そのために君は働け、そのために君は学べ。そしてそのために君は勉強するんだ！

9. LOVE OTHERS for yourself

僕はこれまで色々な話をしながら君に「何で勉強するのか」を説明してきた。

勉強とは広い世界を、自分以外の人達の営みを知る事だった。世の中にはどんな国が、人が、文化があるのか。自分はどんな国に生まれ、どんな人々の手によって育てられてきたのか。どんな環境の中で、どんな生物達と暮らしているのか。どんな食べ物を食べ、どんなものを使って生きているのか。勉強する事は他人の事を知ると同時に自分のルーツを知る事になり、自分という人間が将来この世の中でどのように他人と関わり、どうやって生きていくかを知る事にもなる。勉強とは正に自分が生きていく方法を知る事であった。

そして勉強は学びへと続くという事を説明した。勉強によって知った世の中のいろんな「生きる道」、その道の中から自分の道を選び、その道を究めていくのが学ぶと言う事だった。ただ知っているだけではなく、自ら学んだその道を使って「誰かを喜ばせていく」。道は様々だ。一つの道だけを洗練する人もいれば、色々な道を組み合わせる人もいる。自分が助きたい誰かにとって必要ならば、臆することなく新たな道を吸収していく。そうやって「仕事」が生まれていくのだった。

やがて人は仕事をして、生きていく。一人の自給自足から他人との物々交換、そしてお金を使った経済へと社会は変化した。それでも人が自分の仕事を追究し、他人の仕事に感謝する仕組みは変わっていない。人は一人では生きていけない。それが勉強から学び、そして仕事をしていくまでずっと通じる一つの真理だった。

人はみな限りある命を生きている。日本人は世界一の寿命を持つ長寿国だ。それでも80年も生きれば多くの人は死んでしまう。まだまだやりたい事がある、もつとあれもしたい、これもしたい。そう思いながら自分の生涯を終えていく。でも、命の終わりは「人生の終わり」ではない。君が生きた軌跡は、君が誰かに与えた影響は君の後に生きていく人の人生に深く刻まれ、脈々と受け継がれる。お父さんお母さんからお祖父ちゃんお祖母ちゃん、ご先祖様の生きた証が君の中に残っている。それと同じように君の子ども、君の孫、君が出会った人、その人の子どもも孫もその先も。何百年も何千年も、君と言う一人の人間が生きた証が誰かの心に刻まれていくんだ。いい事をすれば未来はいい人達で作られるだろう。悪い事をすれば未来の「子供達」も悪い事をするだろう。僕らが死ぬ時、それはその先の人生を誰かに託す時だ。今までもそうやって人類のバトンは繋がれてきた。僕も君もそんな見えないバトンを心の中に持っている。

LOVE OTHERS (他者を愛せ)。

人が生きるということは「他人」を抜きにしては成立しない。他人がいなければ君は生まれてこなかった。他の生物がいなければ君は生きてはこれなかった。他人と仕事を分け合えなければ君は生きてはいけないだろう。君と結婚する人は君と一番仲のいい他人だし、生まれてくる子どもは君に一番似ている他人だ。

だったら思いつきり他者を愛そうじゃん！

思いつきり興味を持って、思いつきり誰かの事を考えて、思いつきり喜ばせてやろうじゃん！自分の事を一生忘れられないくらい、そいつが死ぬ時にですら「アンタがいてくれてよかった」と思う位の事をしてやろうじゃん！

誰かに感謝されて嫌な人はいない。誰かに媚びるのではなく、君が学んだこと、ものすごく好きなことで、他人を感動させたり、助けたりすることが出来たら最高じゃないか？

農業が本当に好きな人が開発した、メチャクチャうまい野菜、それを食べる僕らはメチャクチャ喜んで、作った人に感謝する。空と飛行機が本当に好きな人が連れて行ってくれる空の旅、そのサービスを受ける僕らはメチャクチャ喜んで空の運転手さん達に感謝する。自分の仕事は誰かを喜ばせるために、相手の仕事には感謝を。誰もが誰かを愛し、「アンタがいて

くれてよかった」になりたくて活動している。きっと世の中はそんなLOVE OTHERSで回っているんだ。

「誰かのために」なんて言うと、まるで自分がいなくなってしまうような気がするかもしれない。でも、他人のために頑張ることは決して自分を犠牲にすることじゃない。誰かに感謝されて嬉しい自分がいる。君が今まで生きて学んできた、君の道で誰かを喜ばせる時、誰よりも君自身が一番喜ぶはずだ。この広い地球の中で、君という一人の小さな存在が誰かに影響を与えるその瞬間、君は自分が今「生きている」ことを実感するだろう。いつかは死んでなくなってしまう命だとしても、君が生きて誰かに感動を与えたという事実は決して色あせない。脈々と誰かの心に刻まれていくんだ。だからそれは誰かのためではなく、「自分自身のため」なんだ。

LOVE OTHERS for yourself (自分のために他者を愛せ)。

思いっきり誰かを、自分以外の他者を愛そう。家族を、友達を、恋人を、それだけじゃダメだ。お客さんを、クラスメイトを、自分と関係のある人を、まだまだそれだけでもダメだ。地域の人を、国の人を、世界の人を。他の生物を、環境を、地球と言う一つの星を。君とつながるあらゆる「他者」に興味と関心を向け、愛していく事が君の人生を限りなく素晴らし

いものにしてくれる。LOVE OTHERSな君は、きつと他の誰からも愛されるだろう。人間は一人ぼっちで小さい存在だけど、LOVE OTHERSな僕らはあらゆる他者とながる事ができるんだ。

そうやってLOVE OTHERSの輪が広がった時、きつと世界は面白いものになる。限りある命の一分一秒でさえもワクワクドキドキしていられるだろう。約200の国(国際連合加盟国は192カ国)に約68億の人間がいる。5億994万9千平方キロメートルの地球を舞台に、今分かっているだけでも175万種の生物が生きている。遥か遠い宇宙にだって、もしかしたら君を待っている他者がいるかもしれない。君はそんな誰かと「自分がワクワクするために」「自分が喜ぶために」出会って、愛していくんだ。

もう既に君が今までしてきたことで、君に感謝してる人がいるはずだ。勉強して学んで働いて、その感謝をもっともつと大きくしていこう。LOVE OTHERSが大きければ大きいほど、君が、相手が、一生忘れない記憶として刻まれるんだ。

だからもつともつとLOVE OTHERS！君の愛で誰かを感動させようぜ！

LOVE OTHERS for yourself

他者を学ぼう！この世界はたった一人の自分と、無限に近い他者で出来ている。そんな「誰か」の事を知ろう。

他者を愛そう！誰かの心に自分の存在を刻みながら、自分のために「LOVE OTHERS」。

熱く生きよう！たとえはかない命でも、君の生きた証はきっと誰かの心に刻まれる。だからLOVE OTHERS！

勉強する (生きる方法を知る)



学ぶ (生きる方法を磨く)



生きる (LOVE OTHERSを実現する)



育てる (愛の種を蒔き、未来を託す)



Love
others!



LOVE OTHERS

作詞・作曲 なかよし学園

ひとりぼっち感じる心があるのは
君が誰かと深く深くつながり合っていていくため
不意にこぼれる熱くやさしい涙が
いつか誰かの乾いた心うるわす日がくるから

あきらめずに行くんだ 貫く勇気を持って
限りある命を限りなく生きるために

愛の種を飛ばそう！できるだけ遠くまで
誰かの心に届くことを願って
愛の種を飛ばそう！命が枯れ果てるまで
誰かの心にその思いが届けば
そこで芽が出で花が咲きまたどこかへ飛んでいくだろう

永遠に咲き続ける愛の花

信じきれない疑う心があるのは

君が誰かを強く強く探し求めてるため

すべてを許した眩しいばかりの笑顔が

いつか誰かの閉ざした心開かず日がくるから

割り切らずに行くんだ 君自身が希望となれ！

限りある命を限りなく生かすために

愛の種を飛ばそう！できるだけ遠くまで

誰かの心に届くことを願って

愛の種を飛ばそう！命が枯れ果てるまで

誰かの心にその思いが届けば

そこで芽が出で花が咲きまたどこかへ飛んでいくだろう



永遠に咲き続ける愛の花